

百年史編集室の発足までと作業環境の整備

酒井 豊

東京大学が創立百周年を迎えるにあたって、記念事業の一環として『東京大学百年史』の刊行を決定し作業を昭和五〇年四月から具体化しようとしている、編集作業を実質的に支える編集室の常勤の室員を日本史・科学史・教育史の各分野から一名ずつ用意することになっている、ついでには教育史の方からは君を推薦したいがどうか、という内容のお話を仲新先生から伺ったのは昭和四十九年の九月下旬頃のことだった。その後編集委員会小委員会において室員問題を含めどのような事項が検討されているかについて適宜情報を得ながら少しずつ状況を理解していった。

編集室が正式に発足したのは五〇年四月一日であるが、私は二月から非常勤の形で準備に入ることになり、一月二十九日に学士会分館で笠原一男編集委員長、護雅夫副委員長、小林靖之広報企画課長に仲先生のお引合せで御挨拶後、三十一日に初めて広報企画課を訪れた。当時大講堂の三〜五階には総長室をはじめ、事務局庶務課、学務課、広報企画課、入学主幹室、それに記者クラブが居て（人事課は総合図書

特集・百年史編集をふりかえる

館西側三階に居た）、三階以上に用事のある者の出入は殆んど記者クラブ横の鉄扉に限定されていた（記者クラブを除く）。大学紛争の中で大講堂の内部が壊滅的な損傷を受けたことや紛争後の修復で防護用の鉄扉が設けられたことは耳にしていたが、さすがにその鉄扉の前に立ち、覗き窓越しに来訪の目的を説明した時にはかなり緊張した。立ち番の職員が約束の有無を電話で広報企画課に確認しているのが聞こえて間もなく扉が開いたので中に入り、その職員（誰だったか記憶しないのが残念）の指示で講堂の中をぐねぐねと回って五階の現在編集室のある所まで上がっていったのである。

広報企画課は小林課長以下、広報が田中さん、飯塚さん、大屋さん、企画が清水さん、池田さん、岡崎さんの七人で全員が五階の中央の部屋で執務し、南の部屋は応接用のコーナーと広報委員会用のスペース、北の部屋は改革室の資料室となっていた。百年史の編集室としてこの資料室が当てられること、この一室では作業スペース等が不足ならば追々六階の二室を整理して使用することなどは先の面談の中で知らされていたが、この日初めて後の編集室に入ったのであった。

当時資料室の中は改革関係の調査資料・参考資料を収めた書棚が壁を背に並んでいる以外は大小の事務机や椅子が積み重ねられたり、細々としたものやダンボール箱が置いてあった。さらに六階は大きい方の部屋は金属のカードケース、ダンボール箱、紙類の散乱、小さい方の部屋は『東京帝国大学五十年史』、『東京帝国大学学術大観』が床に散乱し、両室とも紛争後に補修して後は実質的に使われることなく不用品の倉庫としてほころぎがつもるのにまかせてある様子であった。私

の仕事は、まず広報企画課の協力を得て、編集作業を開始するための環境を整備することから始まった。二月と三月は様々な意味で四月一日に向けての準備期間であった。

次に、百年史にかけられた多様で高い水準の期待に可能な限り応えるべく、編集室に関係した者一同がそれぞれの個性的な力量を誠実に編集作業に投下したわけであるが、その様々な形態の作業の能率を全体として向上させる上で大きな影響を与えたこととして、作業スペースの拡大と複写機の専有について記しておきたい。

編集室は現在でこそ五室を作業室・資料室、二室を資料・物品置場として使用しているが、実はこれらの中で通常の居住になんとか堪えるのは五階の三室だけで、他は種々の難点のために長期間の執務には勿論、資料を扉付きロッカーに入れずに置くには不適な状態である。

改革室の資料室一室をもって発足した編集室が五階の他の二室を入手して室員の作業室と資料室に充て、部屋毎に機能を分けられるようになったのは昭和五十四年九月に至ってのことであって、これは本部庁舎の完成に伴う広報企画課の移転により実現したのである。広報企画課の移転によって生じた困難もあったが、編集室の作業には最も多い時には一〇名を越える人員が同時に動員されていたのであり、さらに収集したり借用したりした大量の資料を操作しながら作業を進めるには、このスペースの拡大は無くてはならなかったのである。ついでは、このスペースの拡大は無くてはならなかったのである。ついでは、編集室の実働部隊(?)は大学院生か大学院修了後間もない人たち(私を含めて)であって、事務局の一面で隣に本部職員が存在を意識しながらの作業はいかにも伸び伸びしなかったのであるが、翌年

六月に三・四階に学生部が移転してくるまで大講堂の三階以上を百年史で「占拠」したことによって、一同が精神的に向上したと感じている。

複写機のごとは編集室が発足した時から大きな悩みであった。編集室が使用を許されたのは広報企画課の湿式でロールペーパーを用いる形式のリコピーと庶務部三課一主幹等が共用していたゼロックスであるが、前者は使用頻度は後者ほどでないにしても、遅い、仕上がりが不均質、切り貼りに不適などの難、後者は使用頻度が極めて高い、編集室の使用枚数の多さが他課の響登を買うなどの難があった。加うるに当時庶務部が導入していたゼロックスは原稿を置く面が湾曲している、厚い簿冊や固い表紙の付いた書物からの複写は単にガラス面に原稿(複写部分)を置いたのでは全体の半分程度しかピントが合わないという、我々の作業にとっては本当に厄介な機種であった。この懸案も昭和五十四年九月の事務局移転に伴って一応編集室の希望に沿った専用のゼロックスが編集室内に置かれることになって大きく前進した。このころのことを考えると、現在のように拡大・縮小自在のものが二台も置かれている状況はまさに隔世の感がある。

その他作業を円滑に推進させる諸条件との関わりにおいて記録しておくべき事項は決して少なくない。編集経費をめぐることや編集組織の管理系統などのごともあるがここでは省略したい。数十年後に改めて行われるであろう年史編纂事業のころには、編集作業の形態そのものが現在とはかなり異なっていることであろうから、いずれはここに記したことも単なる歴史の一コマとなるはずである。

編集室の三つの委員会について

中野 実

昭和五十六年春、三十歳の一歩手前であった。東京大学百年史編集室の専任になったのは。端的に五里霧中。羅針盤もないまま大海に漕ぎでるような不安な気持であった。案の条、その年の夏に、十二指腸潰瘍になったが、医者からは、「人並みの神経」を持っていたのか、と揶揄された。ただし、編集室とのかかわりは、五十三年から非常勤室員としてあり、その時のほうが「内的葛藤」は激しかった、と記憶している。それでも、五十六年という年は公私両面においてわたしの軌跡上の画期であった。

そして、五十八年度から連年出版が開始された。出版スケジュール（就任以来何回作成したか忘れてしまった）を睨みながらあわただしく編集作業を進めていったが、実際の忙しさは予想以上で、最初の修羅場は「通史一」の出張校正であった。このような百年史編集に直接かかわる事項ばかりが印象に残っているのではない。六年の間には、このほか数多くの事件、エピソードを始め、編集室としての恒常的作業（出版物の作成、資料調査、人事、経理等）にかかわる事項がある。それらを編集室の記録として止めておくことは必要な課題であるが、いまだ充分な整理期間もないため、他日に期すことにしたい。

以下においては、編集室における編集作業にかかわる委員会（会合）について、特に五十六年以降のことをメモ的に記すことで、責をふさ

ぐことにする。

まず、室会議について。昭和五十年四月編集室発足以降、毎月一回室会議が開催され、昨年九月までに一〇二回を数えた。室会議は編集室の運営全般を協議し、室長、専門委員、室員、広報企画課職員から構成されていた。この会議は記録がとられ、その要旨は編集室の唯一の公的記録である。

専門委員会。昭和五十六年五月に専門委員だけが集まる専門委員会が開催された。第一回の議題をみると、東京大学百年史編集委員会の準備、通史編試験執筆原稿（タイプ稿）の調整作業、資料編について、となっている。この委員会が、「通史」、「資料」の編集、刊行までの内容の決定、課題の解決などを担った。

第二回では、編集作業にかかわる事項として前年二月に作成された百年史執筆要項および四月の「執筆上の統一について」の再検討を行い、百年史（通史・資料）の体裁統一上の問題点を処理していった。

通史の例をあげると、元号のあとに補う西暦は平活字と採用、太政類典・公文録・公文類聚（集）など、まとまった法令集の出典表記は編章、年月は省く、といったことを始めとして、引用の形式、括弧の使用、単位の表記、年号の頻度など、細部にわたり検討した。さらに次に述べる校訂作業委員会および「資料」担当者からその都度提起される課題を処理した。そして最終的に「通史」の仕様が決定されたのは、五十八年七月二十日に開催された出版社の編集および印刷担当者との会合のときであった。

このほかにも適宜の課題を処理してきた。創立百年記念学術研究奨

励金による学内共同研究「東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究」の推進、近年では「東京大学百年史編集室収集史料の措置について」（本誌第五号参照）を纏め、総長に提出している。

校訂作業委員会。この委員会を設けることは特に「通史」のタイプ原稿整理（引用文、出典、表記などの体裁上の統一）のため、第一回の専門委員会で提案されていた。第一回は五十六年十月におこなわれ、最終巻刊行まで継続された。初会合では全般的な打ち合せを行い、二段階方式（作業委員会で処理できない問題は専門委員会に判断をゆだねる）で運営する、タイプ原稿の出典記入を早急に依頼して回収する、「通史」各巻担当の専門委員に校訂を経たタイプ原稿を集中して、執筆分担者と問題の処理につき交渉する、といったことを決めた。一、二回は大講堂旧総長室で行ったが、編集室から離れているため、校訂に必要な資料の運搬が面倒なので、六階の部屋に移った。その部屋は文部省往復、公文類聚などが置かれた資料室であるにもかかわらず、夏は暑く、冬は寒いという、きわめて「野生的」な環境であった。冬などは手がかじかむということが屢々であった。五十八年四月に、再び移動する。今度は大講堂の正面から入ってすぐ左側の部屋であった。六階に比べ格段の環境であり、什器類も搬入されて、ようやく落ち着いて作業ができるようになった。校訂の作業は、一日でこなせる項目は最大限四、五項目であるため、刊行期限に沿った校訂の日程を調整するのに苦慮した。また、校訂の手順、方法も、いろいろと試行錯誤が繰り返された。当初は、一項目毎に読み合せを行ったが、最終的には一人が予め校訂案を作成し、それをもとに検討すると

いう方法になった。

室員打合せ会。第一回は五十八年四月八日に行った。これは、五十八年度からの連年出版という事態に対処するために、「通史」、「資料」各巻に配置された室員間の実務報告と作業進捗とを目指していた。また、このときにはすでに「通史一」、「資料一」の原稿がほぼ完成していたため、従前の態勢、すなわち室員の「試験執筆原稿」の作成を保障するという個別作業態勢、を変更して実際的な共同作業態勢を作る、という意図もあった。そのひとつの表れが、それまで執筆室と呼んでいた部屋の机の配置の変更であった。壁にむかって横一列に並んでいた机を、「通史」、「資料」別に向い合せにした。若干の不協和音を生じさせたが、この六月まで継続された。現在は書棚二〇本が据えつけられ、まったく当時の姿をとどめていない。毎月一回程度の割合で集まり、編集・刊行の実務的処理を行った。

五十八年からは室会議の開催の間隔が長くなった。この打合せ会を始めとして、さきの専門委員会、校訂作業委員会などが、連年出版という「非常事態」に対応したのである。しかし、刊行の最終年度は打合せ会もすつとび、ひたすら編集作業に追われ続けた。

以上、室会議以外の三つの委員会（会合）について、編集作業に直接かかわる事項についてメモ的に記してみた。それぞれの委員会（会合）の一回一回が、現在では「思い出」になろうとしている。それらを単なる「思い出」として終わらせるのではなく、将来への確固した蓄積となることを目指したいと願う。

最後に、百年史の編集・刊行のためにご協力をおしまれなかった学

内外諸機関に対してお礼を申し上げます。そして「異境」の地にあって戸惑うことの多かったわたくしを叱咤激励してくれた、専門委員および室員同僚にも謝意を表します。

もうひとつの「百年史」

小川 千代子

百年史編集室は昭和六十二年三月三十一日をもって閉室の予定である。この、閉じられようとしている百年史編集室が動き出したのは昭和五十年二月、正式に専任職員二名が置かれて業務が始まったのが、昭和五十年四月一日であった。しかし、「ローマは一日にして成らず」の格言のように、百年史編集室にもその「前史」がある。

昭和四十二年、いわゆる大学紛争が始まる直前の頃、実は最初の「東京大学百年史編纂委員会」（以下「編纂委員会」と記す）が組織されている。これがもうひとつの「百年史」、つまり百年史の前史なのである。この編纂委員会の記録である「昭和四十二年度昭和四十三年度東京大学百年史編纂委員会」という簿冊は昭和六十一年現在、事務局庶務部広報企画課に保存されている。そのことをここに記し、百年史編集室の前史とその記録の存在を明らかにしておきたい。

さて、本題にはいる前に、東京大学ではどのように文書を管理しているか、少し見ておこう。東京大学内のさまざまな規則をまとめて東京大学事務局が編集し、帝国地方行政学会が発行している「東京大学規則集」という加除式の本がある。この「東京大学規則集」には昭和六十一年八月現在文書管理規則、あるいは文書保存規程といったものは見当たらない。しかし、ここに収録されていないが「東京大学事務局文書管理規則」（以下「文書規則」と記す）が昭和五十五年五月六

表1 簿冊「百年史編纂委員会」目次

頁	年 月 日	摘 要	備 考
1	42. 7. 8	第1回議事抄録	
20		委員名簿	
21		第1群議事抄録	
25		創立百年記念事業組織図(案)	
26		創立百年記念事業(参考)	
29		創立百年記念事業組織図(案)	
31		医学部創立百年記念事業	
33		経済学部, 教養学部等	
36		過去の例	
37		京都大学70周年記念事業	
41	42. 9. 29	慶応義塾創立百年記念	
47		部局年史等の編纂状況について	
54		第2回議事抄録	
70		第1回議事抄録	
74	43. 2. 29	部局年史等の編纂状況について	
80		第1回百年史編纂に関する懇談会要旨	
87		懇談会議題	
93	43. 5. 16	第2回議事抄録	
104		第2回百年史編纂に関する懇談会要旨	
109		百年史編集の基本要綱案	
117		”(定稿)	完

日付けで施行された。その制定理由には「事務局における文書の管理は、その重要性にもかかわらず客観的な基準となる規定がなく、慣行によって処理されてきたが、文書処理の手続きが各部・各課(主幹)不統一で合理的でないので、これを合理化するとともに、文書に対す

る責任を明確にするため、この規則を制定するものである。」とあり、これが東京大学にある唯一の文書管理規則であるといわれる。庶務部、経理部、施設部の三部から成る事務局の文書は「他の法令に別段の定める場合」を除き、すべてこの規則の適用を受ける。この第四六条、文書の類別、保存期間では「各類別の基準は、所管部において定める」、第四七条、文書の廃棄では「保存期間が経過した文書は、所管課長の決裁を受け、文書保存台帳に廃棄の旨を記載して廃棄するものとする」とある。どの文書をどれほどの期間保存し、その後は廃棄してもよいとするかという基準の設定については部長が、保存期間を満了した文書を廃棄するか否かの判断については課長が、その責任者であることが読み取れる。

幸い、先述の「編纂委員会」の簿冊は広報企画課の担当者の配慮により即座に取り出せる形で今日まで保存されているが、今日の文書規則の下では仮に、広報企画課内部でこの「編纂委員会」という簿冊の保存は必要としないと認められれば、そのまま廃棄される可能性も皆無とはいえない。また保存期間内の文書をどこで、だが、どのよう

に保存管理すべきかについては、文書規則に特に述べられていない。だから「編纂委員会」の簿冊が、将来どのような取り扱ひを受けるのか、つまり棚の隅に追いやられほこりをかぶってしまうのか、あるいは不要と認められて廃棄されるのか、といったことについて我々にはわからない。

さて、話を元に戻し、この簿冊の外観からみていこう。これは昭和四十年代の簿冊に共通の外観、すなわち白板目紙を用いた仮とし製本

がほどこされ、表紙の大きさはB5よりやや大きい。表紙と背表紙には墨筆で「昭和四十二年度昭和四十三年度 東京大学百年史編纂委員会」と記されている。厚さは約3センチほど、つづり込まれている文書は全てB4かB5に統一されている。各頁とも右肩にナンバリングで頁番号が印字されている。冒頭頁には、この簿冊を編綴したときに作成したとみられる手書きの目次がある(表1)。この目次を手掛りに簿冊の内容を見ていこう。

昭和四十二年五月三十日(火)午前十時から、大講堂小会議室(旧称便殿、現在は学生部厚生課が事務室として使用)で「第一回東京大学創立百年記念事業準備委員会」が開かれている。ここでは主に百年史編纂についての意見交換が行われており、その意欲と規模たるや、事業を結果として担ってしまった我々の到底考え及ぶところではないのに、今更ながら驚く。特に、時の総長大河内一男氏や史料編纂所長竹内理三氏の発言からは当時の人々がいかに大きな理想をもってこの企画立案に着手したかが偲ばれる。

総長「東京帝国大学五十年史」は、いわば制度的なものであり、それはそれとして意味があるが、百年史はそれだけでなく、東大を中心とした学問の発展までも考えてみたら、国際的にも有意義なものとなる。特に五十年史は、大正七年の第一次世界大戦までのものであるが、その後の五十年には関東大震災、昭和初期の思想問題、満州事変、日華事変、第二次世界大戦、大戦後の学制改革等大きな変革があったので、量的にも膨大なものとなると思う。

竹内「私の構想としては、百年史は近代日本の学術発達史的なものを主流

とし、社会的立場を加えたほうが良いと思うが、それはあくまで正確であることを必要とする。そのためFoot Noteや資料も折込み、別冊として読物的なものを加えたい。大体800頁10巻程度で、総論3巻、部局の歴史3巻、学生運動史・建物史・事務局の歴史等を2巻、その他というようにしたほうが読み易いと思う。

その日竹内氏は「百年史編纂(準備)委員会」委員長に推せんされた。

こうして、昭和四十二年七月八日の第一回編纂委員会の開催となる。起案書には「第一回東京大学百年史編纂準備委員会議事抄録」というタイトルが書かれ、その中の「準備」の文字が二重線で消されている。当初考えられていた名称が変更されたことがわかる。

総長と竹内委員長がここで再び五月三十日と同じような企画を述べている。興味深いのはすでにこの時、百年史編集作業終了後の資料の保存が話題にのぼっていることである。議事録をみる限り「資料」という言葉で考えている内容は人により相当の差がある。或いは人によっては「史料」を意図して討論していたのではないかとも思われるが、議事録の起案に際してそこ迄いねいな検討は行われていなかったのかもしれない。いずれにせよ、原資料を想定して話している人と、原資料から手書き(当時コピー技術はまだ十分に発達していなかった)で一定の規格の用紙に転写すべきだという考えを述べる人、検索手段を整備することの大切さのみを訴える人と、この「資料」保存の件を巡って議論に花がさいた模様は、一見不愛想な外見の議事録の中から賑やかにきこえてくるようで楽しい。

夏休みを経て九月二十九日、第二回の編纂委員会が開かれた。内容は徐々に実際的な編纂業務のことがらに変化している。特に資料収集の実務と編集上の必要資料（主として刊行物）の配布の問題、作業能率のことなどでこの時も議論は白熱したらしい。結局、小委員会を設けて更に実務的な動きを目指すことが決められ、この日の議事は終わった。

明けて、昭和四十三年二月二十九日、事務局長名で「東京大学百年史編纂に関する懇談会」を開催する旨が史料編纂所長、附属図書館長、文学部長及び文学部尾藤助教教授に通知された。開催場所は附属図書館館長室、午後一時からである。この時配布された議題書は、委員会のそれとは異なり手書き青焼きコピーが用いられている。参加人数が極端に少ないので経済効率を考えてのことであろうが、今となっては読みにくいし、保存も不確かなのが悔やまれる。議事録は他のものと同様タイプ印字でワラ半紙に謄写版印刷である。編纂委員会に配布する必要があったのであろうか。席上、間もなく停年退官することとなっている竹内史料編纂所長に、引き続き「百年史」事業の中心として委員をお願いすること、百年史編纂のための部屋を図書館内に設け、とりあえず年表の作成、資料整理等の仕事のため、史料編纂所所屬として講師、助手を置き、事務処理のために女子一名、計三名を置く、という具体的なカタチがまとめられている。私事ながら、上記女子一名というのが今日の自分の身分の根源かと思われ、ひどく感慨深かった。「次回は三月十四日（木）午前十時から開く」と議事録には記されているが、二月二十九日付けで起案された三月十四日の懇談会開催

通知の起案書には「(中止)」と記されている。記録も他にないので、三月十四日の懇談会は開かれなかったと考えて良からう。簿冊には、このあと年度が改まった昭和四十三年四月頃の委員交替の記録が幾つか見られる。何れも停年退官した委員の後任推薦の文書である。

昭和四十三年五月十六日、第二回懇談会が開かれた。この時の会議通知には昼食の準備をしている旨の添え書きがあり、朝十時から少なくとも二時間以上、図書館長室で懇談会が開かれていたことが推察される。議事録から見ると、ここでは百年史編纂関係者の立場の明確化が主な話題だったらしく、特に「百年史編纂委員および編纂に従事する方をなんらかの意味でオーソライズすることについて、事務局で検討する」、これに「関連して、百年史編纂委員会の性格を総長から明確にしてもらいたい」という、実務を行うには当然必要なことから、企画立案段階では見落とされ易い点が列挙されている。いよいよ仕事が進出す時期にきた感触が伝わる。この時、竹内氏からは「東京大学百年史編集の基本要綱案」が提出され、その中で全二十巻構成の壮大な構想が明示された。また同時に編集作業終了後の収集資料のとり扱いについて「中央図書館に保存して将来の研究に資する」という方針が示されている。「東京大学百年史編集の基本要綱案」全文は次のようである。

東京大学百年史編集の基本要綱案

1 編集の動機

昭和五十三年の東京大学創立百年（明治九年を起点とする）を迎える記念事業の一環とする。

2 編集の目的

わが国の近代国家および近代社会の発展に中心的役割を果たした人物育成の場としての東京大学および学術発展の指導的役割を果たした学問研究の府としての東京大学の果たした歴史を明らかにするとともに、将来の大学のあり方についての考察にも資する。

3 編集・執筆の基本方針

- (イ) 前掲の目的に従い、大学の制度史考察は勿論であるが、むしろ東京大学および東京大学関係者のわが国の国家社会および学術発達への寄与、影響等に重点をおく。
- (ロ) 資料の収集は、各部に個々の資料は勿論、ひろく新聞雑誌等にあらわれた東京大学および東京大学関係者に関する記事等も、すべて収集する。

(イ) 資料は、文献資料のほか、生存長老・関係者からの聞きとり、絵画・写真・遺物等あらゆるものを含む。

(ロ) 各部署委員は、各部署個々の(ロ)の資料の収集、編纂、執筆を担当し、本部委員は、東京大学全般に関する(ロ)の資料を収集、編纂、執筆する。各部署委員は、(ロ)のうち、各部署の果たした学術的役割についてとくに重きをおく。

(ハ) 百年史執筆については、すべて資料にもとづいた客観的態度を堅持する。しかし、単なる事実の羅列ではなく、①学術の発展 ②大学の自治 ③学生・研究者育成の場としての大学の役割を歴史的に説明することを全体に一貫した基本線とする。

4 百年史の規模

(イ) 収録の期間

東京大学の前史として、江戸幕府の各種の学問所、とくに昌平坂学問所の開設より、昭和五十三年の時点までを内容とする。

(ロ) 規模は、総巻数全二十巻(各冊六〇〇〜一〇〇〇頁)

A 通史編

第一巻 東京大学前史

特集・百年史編集をふりかえ

第二巻 東京大学時代(明治十九年迄)

帝国大学時代(明治三十年迄)

第三巻 東京帝国大学時代Ⅰ(大正期迄)

第四巻 〃 Ⅱ(昭和二十二年迄)

第五巻 東京大学時代(昭和五十三年迄)

B 各論編

第六巻 部局史Ⅰ

第七巻 〃 Ⅱ

第八巻 〃 Ⅲ

第九巻 〃 Ⅳ

第十巻 〃 Ⅴ

各部署の学術研究発達史を中心とする。

第十一巻 学生史

第十二巻 建築史(キャンパス史を含む)

C 資料編

第十三巻 資料編Ⅰ

第十四巻 〃 Ⅱ

第十五巻 〃 Ⅲ

第十六巻 〃 Ⅳ

D 別編

写真集

百年史概説

英文百年史

百年史年表

5 収集した資料は、原本または複本として、中央図書館に保存して、将来の研究に資する。

簿冊はこの基本要綱案を最後に終わっている。以後約一年の間、東京大学はいわゆる「紛争」で平常でない毎日を送ることになる。そして、「改革」の時代を経て、漸く平静が戻った昭和四十九年、現在の

百年史編集室の基礎がきずかれた。私が百年史編集室で過ごした昭和五十年四月一日以来十二年間、学内は比較的平穩であった。史料の発掘や保存、そして「歴史」を編むには好都合だったと言える。この間、ふりかえって思うことは、日々が平穩の内に過ぎゆくことの有難さの一言に尽きる。この平穩の時代故に、『東京大学百年史』はどうかやら完結を見たのである。

紛争前の前史百年史時代から企画に関係しておられた稲垣栄三先生は、昭和六十一年六月に開催された東京大学百年史刊行記念パーティの席上、「自分は昭和四十二年の百年史のときから今日まで、百年史との関係が途切れたことがなかった。自分の人生の三分の一はこう考えると百年史であったともいえる。」と言われた。時間の流れとそのご尽力には頭が下がる。(もっとも「人生の三分の一」という単位にこだわるなら、私もほぼ同様であることに後から気が付いた。)しかし、他の草創の頃の諸先生は、すでに鬼籍に入られた方も多く前史百年史と完成された百年史との接点、つまり記録されていない経過を更に明らかにするのは、そう簡単ではあるまい。またそうした仕事は一部関係者にとつての興味は深くとも、一般にはそれほど興味を持つかどうか解らないので、今回は残された公式記録から「前史」の様子を垣間見るにとどめておく無精をお詫びして筆を置きたい。

(昭和六十一年八月三十一日記)

梅 沢 ふみ子

『東京大学百年史』の刊行もまもなく完了する。この年史について、今後さまざまな角度から評価がなされることと思うが、この編集にたずさわった者の間でも、これによって何が達成されたか、どのような問題が残されたかについて確認しておくことが必要だろう。但し、ここで『東京大学百年史』そのものを回顧することなど、私自身の力量からみても、とてもできない。ここでは、とりあえず、私自身が最も深く関わった第一編・第一章・第一節の審書調所Ⅱ開成所に関する史料収集・執筆をとりあげ、担当者として気にかかる問題を二、三書き止めておこうと思う。

幕末に徳川幕府が設立した洋学の研究・教育機関である審書調所(後に洋書調所、さらに開成所と改称)は、東京大学の前身のひとつであるが、『東京大学百年史』の直接の前提である『東京帝国大学五十年史』の中では扱われず、今回の『百年史』で始めてとり上げるようになった部分である。この執筆にあたり、既刊の先行研究から多くのことを学んだのは言うまでもないが、さらに、幸いなことに、安政二年審書調所設立準備開始より慶応四年六月開成所の新政府への移管に至る十三年の歴史のうち、安政二、三年と安政六年より慶応三年までの約十一年分について、この機関の管理運営担当者が幕府当局と交わした文書すなわち「審書調所立合御用留」「開成所伺等留」「開成所事務」が史料編纂所に所蔵されていたため、主としてこれに依拠し

て、蕃書調所Ⅱ開成所の歴史を再構成した。従ってこの機関の管理運営に関わる範囲では、主要な問題をほとんどすべて叙述のなかに盛り込むことができたのではないかと思う。

但しその反面、管理運営と直接関わらない分野の問題は、この項の中で十分に論じることができなかった。たとえば、蕃書調所Ⅱ開成所で行われていた学問の具体的内容については、ほとんど知ることができなかつた。僅かに、素読教師だつた赤松則良や化学教師の辻新次の回顧談等を通じて、ほんの一部を窺うにとどまつた。そのためもあつて、本稿の中では蕃書調所Ⅱ開成所の洋学の水準を、諸藩の洋学教育機関や洋学の研究教育を行なつた私塾蕃一たとえば適塾などーと比較することができなかつた。もしこれができたなら、幕末の洋学史に於ける蕃書調所Ⅱ開成所の位置をより明確にしえたであらう。

さらに残念だつたのは、蕃書調所Ⅱ開成所で学んだ生徒についての史料がほとんど得られなかつたことである。「開成所事務」・「開成所同等留」によれば、文久二年当時百人程の生徒が英学を学んでおり、慶応三年に至ると、英学・仏学・数学修業のため日々数百人が出席していたという。しかしながら、その中で名前がわかるのは、後に教授方等として抜擢される極く僅かの者だけで、残りの大部分については、全く不明である。いったいどのような人々がどれくらいの期間、ここで洋学を学んだのだろうか。ここでの洋学教育は彼らにとってどのような意味を持っていたのだろうか。数百人あるいはもっと多数にのぼる洋学を多少なりとも身につけた人々は、その知識を活用する機会を、その後与えられたのだろうか。蕃書調所Ⅱ開成所の教育機関と

しての機能を論ずる際、このような問題をとり上げずに済ますことはできない筈であるが、実際は生徒に関する記録が見つかからないため、その答を考へる手掛りすら得られなかつた。他にもまだいろいろ問題点があると思うが、この項を執筆した者として、私は以上の二点が最も心残りである。

但し、以上の問題点が今後の研究の進展によって克服されることは十分に考へられる。たとえば、蕃書調所Ⅱ開成所の旧蔵本の多くは現在静岡県立中央図書館の葵文庫に納められているが、それらの蔵書の調査や他の洋学機関の蔵書との比較等を通じて、蕃書調所Ⅱ開成所の学問の内容や水準を推し測ることは、ある程度可能であらう。また生徒の実態やその後の進路等を知ろうと手掛りとなる史料が将来発見されないとも限らない。蕃書調所Ⅱ開成所の研究は、研究者の力量と新史料の発見次第で、今後新たな展開を示す可能性は十分にあり、それによつて『東京大学百年史』の中で私が描いた不完全な蕃書調所Ⅱ開成所像が修正されることが期待される。

ここまで、蕃書調所Ⅱ開成所の項に即して述べてきたが、同様のことは程度の差こそあれ、『東京大学百年史』のどの部分についても言えるのではないか。すなわち、『東京大学百年史』は一九七〇、八〇年代の研究水準を反映しており、今後の各方面における研究の発展により、東京大学の歴史像は変化してゆくだろう。それにつけても気にかかるのは、私たち室員・執筆員が『百年史』編集のために収集し執筆の根拠としたさまざまな史料や、編集の過程で行なつた調査報告等の今後の取り扱われ方である。『百年史』編集がほぼ完了した今でも、

これらの史料や調査報告は少しも有用性を失っていない。私たちを含め研究者にとって、今後研究を進展させるうえで不可欠のものも数多くあるように思われる。『百年史』完結後もそれらが活用され、今後の研究の発展に役立てられることを願ってやまない。そのための具体的な対策が立てられることを切に期待する。

編集実務の一端に携わって

小熊伸一

一九八二（昭和五十七）年三月、立教大学大学院博士後期課程へ進むとすぐに、寺崎昌男先生から『東京大学百年史』の編集を手伝ってくれませんかというお話をいただきました。自分のような未熟な者が果してどこまでやれるだろうかという不安はありましたが、当時、近代日本の学問史ならびに教育学説史を研究テーマとして取り組んでいた私にとっては、掛け替えない仕事であったため、喜んでこの仕事に加わらせていただきました。

『百年史』の仕事の私の担当は、前専任者でありました酒井豊さんのもとで、資料編の史料の収集ならびに整理という作業でした。

ここでは、とくに、資料編の編集の中で、思い出の深いことについて二、三御紹介してみたいと思います。

資料Ⅰ、Ⅱに掲載する史料については、すでに酒井さんが中心となって丹念に収集されていましたので、私は、酒井さんの指示を仰ぎながら、史料の原稿化ならびに校正の仕事を中心にやりました。おかげで、どのように史料を扱ったらよいのかという史料操作や校正の仕方にいたるまで多くのことを学ぶことができました。

また、それと同時に、『東京帝国大学五十年史』編集の折に使われた史料が編集室にあり、その史料の目録化の仕事をまかせられましたことが強く心に残っています。

『五十年史料』は、すでに総合図書館において通し番号が付され整理が行なわれておりましたが、史料の性格が適確に把握できない、史料の対象時期が不明、配列が不統一であることから、これまでの整理には利用にあたって不便が少なからずあったため、これらの諸点に留意しながら目録化しました。

次に、資料Ⅲの編集過程の中から、とくに印象深かった点について触れてみたいと思います。

なかでも、「主要人事一覧」は、苦勞した箇所ですが、これは専任者の中野実さんの指示を仰ぎながら、主として、米田俊彦さん、長谷川郁子さんと私の三人で仕事を進め、庶務部人事課に所蔵されている履歴書関係の簿冊の中から、必要項目をカードにとり、それを整理して作成いたしました。作業を進める過程で人事課の方々には大変お世話になりましたが、とりわけ、記録掛の出井さんには、一緒になって簿冊をめくり人事記録の見方について教えてくださったことなどは忘れがたいことです。

また、この時期、中野実さんをはじめ室員の方々と一緒に、毎晩のように夜十時半過ぎまで編集室に残って仕事をしたり、ある時は近くの旅館に泊まり込みで仕事をしたことなども、きのうのことのように思い出されます。

このように、百年史編集という仕事を通して、多くの方々にお世話になりましたが、なかでも、このような貴重な機会を与えてくださり終始暖かい目で見守ってくださいました寺崎昌男先生はじめ、専門委員の先生方ならびに専任の酒井豊さん、中野実さん、編集室の方々に

心から感謝いたしますと同時に、百年史編集室で学び得たものを今後の自分の研究に大いに生かしていきたいと思えます。

百年史編集室と私

梶田明宏

私が百年史編集室の室員として仕事をしてきたのは、昭和五十九年の四月から、六十一年の五月までであるから、二年あまりに過ぎないが、実際にはそれより以前から編集室には出入りしていたので、もう少し長い付き合いである。もともと、百年史編集室との出会いはいったったか、はっきり覚えていない。編集室との縁は、大学院の修士課程に入学したとき、国史の先輩の照沼、柴崎、季武の御三方がそろって室員として編集室におられたので、何かの用事で先輩達を訪ねてしばしば足を運んだのが始まりだと思う。そのうちに、用事がなくなるとも、暇があれば、三時のお茶の時間を見計って顔を出すようになり、だんだん、仕事をしない以外は室員と同じ様な顔をして居る様になったのである。そうして、正式に室員になる以前にすでに、研修旅行や、年末の大掃除、忘年会に出ていたし、「通史」の刊行記念パーティーにも出て、しっかり記念のダルマにも名前が残っている。

また、小川千代子さんから女性のアルバイトの心当りがいか尋ねられたとき、私の中学の同級生の川上好美さんが、結婚・上京したばかりで退屈していると聞いていたので紹介したこともあった。川上さんと私は生年月日が同じで、私と妙に縁のある人で、今はご主人も交え交際している。明るいい性格で、漫画を描く才能もあり、後に述べる「Zスポ」を絵入りで復刊したりして、たいへん人気があった。「い

い人を紹介してくれた」と感謝され、私の株も少し上がったわけだが、今考えれば、これが編集室に対する私の最大の貢献であったかもしれない。

その様な訳で、室員となったときには既にすっかり編集室にうちとけていて、寺崎室長から、「室員を採用するときは、必ず面接をすることにしているから」と編集室の一角に呼ばれて面接されたのであるが、室長もたいして質問することがなく、ほとんど雑談のようにして終わってしまった。「僕も、たくさんの人を面接してきたけれども、君ほど新鮮味がない人は初めてだ」というような意味の事を室長が仰ったことだけを覚えている。

室員となった時は、「百年史」刊行の体制にはいつていたこともあり、また、以前からの人がずいぶん抜けたこともあって、室員になる以前と雰囲気が違うように感じられた。それ以前に出入りしていた時には、私の知らない「初期」の編集室の雰囲気が残っていたように思われたのである。もちろん、自分の知らない時の事だから、勝手に想像しているだけといわれればそれまでである。けれど、私なりにぼんやりとしたイメージを描いていたのであった。その根拠は、以前から室員の人の会話の断片と、「Zスポ」であった。

室員となる以前から、お茶の時間などに皆がおもしろおかしく話している話題で、しばしば「Zスポ」(「ぜすぽ」と読む)という言葉がキーワードになっていることには気付いていたのであるが、晴れて室員となつてから、ようやく「スポ」が何であるかがはっきり分かってきた。

「Zスポ」とは、「Z百スポーツ」の略で、昭和五十五年頃、現在九州大学講師の新谷恭明氏の創刊にかかわる、百年史編集室のスポーツ新聞として出発した。当時編集室では卓球大会が盛んであり、その速報版として出されたのである。創刊当時の「Zスポ」の記事からは大会の白熱ぶりがうかがわれる。また、編集室には当時既に物置となりつつあった大講堂（安田講堂）での表彰式の写真が残っているはずである。私的ではあるが、講堂を使ったセレモニーの最後であると思われる。

卓球の記事は当時の編集室の雰囲気伝えるのに重要なものだけでも、それ以上に私の興味をそそった内容は、卓球大会以後、編集室のゴシップを記事の中心にしてからのものである（その意味では、「Zスポ」は駅売店に並んでいる一般スポーツ新聞と本質的には同じ）。特に、国史の先輩諸氏の隠された行状を知ることが出来、少なからず私の役にも立ったようである。こうした「Zスポ」の面白さは、記事の内容もさることながら、新谷氏の特異な文才に依っているところが大きかった。そのため、新谷氏が九州へ行かれてから、「Zスポ」は自然休刊になってしまったのである。

その後川上さんが百年史にきて、彼女は漫画の才能を生かし、絵入り「Zスポ」を復刊した。これも室員の身辺情報を中心としたものであったけれども、新谷氏時代とは別な意味で評判があった。しかし、彼女が出産で辞められてから、以来「Zスポ」は出されていない。

この様に、「Zスポ」はプライベートなものではあるけれども、百年史編集室の雰囲気伝えるのには格好なものだといえる。歴史学を

専攻して、自分の生まれてもいない時代を研究する者として皮肉を感じない訳にはいかないが、いまこうして編集室と離れてみると、室員として実際に居た時よりも、それ以前の事の方により眼が行ってしまうのである。

あの頃のこと

狐塚 裕子

あの頃、脇の壁に「関係者以外立ち入り禁止」の紙が貼られた階段を昇って編集室へ向いながら、象牙の塔の、そのまた象牙の塔を昇っていくようで、私は若干の後ろめたさと同時に、奇妙な優越感を感じていた。

大学生生活後半の二年間を本郷キャンパスに通いながら、私は安田講堂の内側を一度も覗いたことがなかった。僅かに地下の一隅に生協書籍部が移転していたものの、安田講堂は紛争の傷痕を生々しく残したまま正面の黒い門を固く閉ざし、一般学生が足を踏み入れることのできぬ「神聖」な場所として威圧感を与えていた。私の学生時代は入学式はなく、卒業にあたっては研究室で学生証を差し出し、これを左手で受け取った主任教官の右手から卒業証書を受け取るだけという、およそ儀式とは無縁の時代であった。そのB4程度の縦長の用紙に横書きの活字、サインペンでちまちまと名前が書かれた卒業証書は、それはそれである種の誇りさえ感じさせるものであったが、かつて入学式、卒業式が厳かに行われ、東大の権威の象徴だった安田講堂に大きなあこがれを抱いていたのも事実だった。

大学を卒業してすぐ勤めた会社を僅か十ヶ月で辞め、それと同時に得た小学校の産休代替の仕事も終わりに近づいたある日、ゼミの指導教官であった伊藤先生にお会いする機会があって御世話を受けたの

が、百年史の仕事だった。その時、編集室があつた安田講堂の中にあるということに若干の魅力を感じたことは否めない。安田講堂の中を案内してもらって、初めて時計台の塔の上から外を見下ろした時、ここがあつた……と高校時代にテレビで見た悲惨な光景を思い浮かべたものである。

ところで編集室に備われた当初、私の給与が人件費からではなく旅費を流用して支払われていたということを知ったのは、しばらく後のことだった。その「旅費」に与えられた最初の仕事は、今ではおぼろげな記憶になりつつあるが、確か編集室の図書の整理だったように思う。当時編集室はまだ「創世期」で、基本的な図書の蒐集が重要な仕事の一つであり、そのため図書の量は凄まじい勢いで増えつつあったが、分類の方法はまだ決められていなかった。それが整理困難な状態にふくれあがる前に分類方法を確定し、それに従って整理するというのが私の仕事だったのである。ちやうど司書の勉強をかじっていたときのことだったので興味をもって仕事に臨み、十進分類法を応用すれば簡単にできると思ったのが大きな間違いで、特殊な分野に偏っている編集室の本を分類することはかえって困難だった。どんな例外にも対処できるような完璧な分類を、と気負ってはみたものの、そんなものができるはずもなく、編集室へ行くたびに、ああでもない、こうでもないといふ分類番号を書き分けては思い悩み、増え続ける本に關しては分類番号を空欄にしたままで、登録作業だけを続けていた。

そんな私を見かねたのだから、翌年春池田（現江頭）祐子さんが新たに室員に加わったのを機に、事務の責任者だった小川（当時弥永）

千代子さんはその仕事を私から取り上げた。池田さんは私が長い間温め続けた分類表の「試作品」を受け継ぐと、「これでいいです」と、いとも簡単に決着を付け、それに従ってどんどん実際の分類作業を進めてしまった。自分でこの仕事をやりとげることには多少の未練を持ってはいた私だったが、ごく短期間の内に本の山が片づけられたのを見て、池田さんの決断力に感嘆し、小川さんの判断が正しかったのだと認めざるをえなかった。

次に私がおお世話だった仕事は、内田祥三元総長の関係史料目録の作成であった。内田家からお預かりした膨大な史料を調査のうえ分類し、研究に際して利用しやすいように簡単な内容を付した目録を作るのである。これもやはり何やかやと理屈を付けては分類に苦しみ、できあがるまでに随分時間がかかってしまった。確か最後の決断の際には、これにも小川さんの力を借りたように思う。それでもタイプ版になった目録を手を取ったとき、安堵と共に満足感を覚えたものである。

あの頃のことには、私が百年史に関わった長い期間からすると、ごく初期の、僅か一年余りのことである。まだ紛争の余韻が残っていた時期で、毎日のように「百年祭反対」のビラが配られ、編集室で仕事をしているという何を何となく公にしづらい、そんな雰囲気があったように思う。編集室に常時鍵がかけられるようになったのも、もとはといえば、かけがえのない史料の保管を第一に考えなければならぬという事情からだったように記憶している。仕事の質からいえば、その後大学院生になって実際の執筆に関わったことの方が、はるかに大

きな意味をもっているだろう。しかし苦勞して作った分類表は、膨大な量にふくれあがった図書に対処しきれない面はあるにせよ、一応の役目を果たしつつ今日まで使われている。内田文書も百年史執筆の際には盛んに利用されており、目録も多少はお役に立ったに違いない。安田講堂は今でこそすっかり——編集室を除いて——一般学生に解放され、中を歩いても何の感慨も起きないが、あの分類表や目録は私にとって愛着のある「我が子」であり、今でもそれを見ると、何となく懐かしいような、面映いような気持ちにさせられるのである。

百年史編集室と私

黒井キヌ

振り返ってみると、私が百年史編集室にアルバイトとして働いていたのはわずか半年ぐらいの間だったようです。それももう四年も前のことになります。月日の流れの早さというものを今改めて感じています。

大学卒業も間近のある日、卒論ゼミの先生から「東大の百年史編集室で働いてみないか」というお話がありました。私は大変びっくりしました。というのは私は実に不勉強な学生で、従って成績も良くなく、卒論の出来などに至っては最悪でした。ですから天下の東京大学で百年史編集室のお手伝いをするなどというのは思ってもみないことだったのです。

しかし、「あの東大の中で働ける」そういう思いが私を駆り立てました。自分の能力も省みず、私は即座にお引き受けしてしまいました。

東京大学は想像していたよりはるかにアカデミックな空気に包まれていました。最高学府としての長い歴史と伝統が肌に伝わってきました。どっしりとした古い建物、歳月を経た樹木、壊れかかった窓や壁、それらの一つ一つからは真剣に学問に取り組んだ多くの人々の姿がほうふつとしてくるようでした。しかしそれは私にとっては何とも言えない威圧感でした。

特集・百年史編集をふりかえる

ばく然とした不安を感じながら、私は百年史編集室のある安田講堂に向かいました。暗い玄関、赤じゅうたんの敷かれた階段、荘厳な雰囲気、激動の歴史をくぐり抜けながら、安田講堂は東大の象徴としての気品と風格に満ちていました。

別世界に足を踏み入れたような心地で、言いようのない緊張感を覚えながら編集室の鉄の扉をたたきました。扉を開けたとたん皆さんの笑顔が私を迎えてくれました。テーブルを囲んでのお茶会が始まり、自己紹介やら家族の話、趣味の話が弾みました。和気あいあいの笑い声が響くなか、気がつくとなじ三時間があっという間に過ぎていきました。重苦しい空気は微塵もなく、明るい家庭的な雰囲気、私の不安は一遍に吹き飛んでしまいました。

こうして私は百年史編集室の室員となりました。仕事といっても、お茶を出したり、コピーをとったり、書類を届けたりするというのが主でしたから、私でも何とかこなすことができました。

百年史編集室で一番思い出深いのは、多くの素晴らしい人々と出会えたことです。

私が抱いていた東大の人々のイメージは、プライドが高くて近寄りづらい、そんな感じでした。けれども現実は今全く違っていました。編集室の皆さんは人なつこくて明るい、純粋な人ばかりでした。執筆員の皆さんも、先生方も、室員の方々も、百年史編集室の中ではまるで一つの家族のように自然に溶け合っていました。私のような能力のない新参者でも素直に受け容れて下さいました。そこには、それぞれの立場の違いを超えた人間的な深い絆があったと思います。

一般企業などとは違い、窮屈な束縛などはなく、皆さんそれぞれのやり方で、それぞれの時間に仕事をしていました。いろんな人々が出入りして、絶えず話に花が咲いていました。ある時は家の話題であったり、恋愛談義であったり、ニューストピックスであったり、聞いていてそれはそれはおもしろいものでした。執筆に携わる方々にとっては、多分それは息抜きのひとときだったのでしようが、私にとってはそちらの方がメインで、今日はどんな話題が飛び出すか、胸をわくわくさせながら仕事をしていたものです。

何よりも感激したのは、皆さんがとても純粋で謙虚であるということでした。地位や名声にこだわり、金銭にこだわり、自分自身の保身に躍起になっている、そんな現代社会の人々とはまるで違った生き方を目の当たりにする思いでした。

数々の思い出が脳裏をよぎります。みんなで飲みに行った時のこと、穏やかな昼下がりに本郷界隈を散索したこと、夏のお昼休みに地下プールで泳いだり、夕涼みに学士会館のビヤガーデンへ行っただけもありました。私の話したことが翌日壁新聞に書かれていた時などは仰天しました。皆さんとてもユニークで、しかも確固たる自分自身というものを持っていて、とても魅力的でした。今だにひとりひとりの方が懐かしく思い出されます。本当に楽しい思い出ばかりです。

今私は専業主婦としての毎日を送っていますが、百年史編集室で校正の仕事をさせて頂いたことがきっかけとなり、たまに校正のアルバイトをしています。百年史編集室では最初から最後まで不真面目な室員で、御迷惑のかけ通しでしたが、私自身にとってはとても有意義な

半年間でした。本当にありがとうございました。皆様の御活躍をお祈りしています。

マージナルなるもの

—— 大学正史の周辺部 ——

古屋野 素材

大学というものが、正規の学生と常勤の教員団とだけから成り立っているのではないことは、いうまでもない。

組織的な肥大化を続けつつ、社会的ニーズの多様化に対応して様々な活動をこなしてゆかねばならない現代の大学においては、その日常的運営が滞りなく進行するためには、まず何よりも事務機構の整備が不可欠である。

そして、大学関係者による学内外における些かでも大学にかかわりのある営みの殆どが、それぞれの場合毎に定められた書式による事務書類に記録され処理され、そこではじめてそのことが「事実」としての証を得る。

このような「事実」こそが、大学史の調査・執筆・編集作業のαでありである。

と、いささか肩肘張った切り出しになったが、八年間かかわった東大百年史の仕事の印象を一言でいうなら、「事務書類との格闘」に尽きる。それまでこのような資料との付き合いが殆どなかっただけに、入室してすぐ総合図書館の地下の移動式書架にビッシリと並んだ古い書類綴りを見せられた時の、「これをどうやって料理して歴史を書くのだろうか」と気の遠くなるようだった感じを今でも覚えている。そし

て評議会議事録の作業資料化の仕事からやらされたのだが、これは私にとっては書類の史資料としての取り扱い方の格好の手ほどきとなり、また大学全体の「見晴らし」や「季節感」というか時間的サイクルの感覚をつかむことができて、とても有益であった。

とはいうものの、それ以来様々な書類と付き合う、というより（基礎的訓練に欠けている私にとっては）苦しい対戦を続けることとなり、けっきょく「草野球チームの打順七々八番でセンター」ぐらいの貢献しかできなかったことを、他の室員の皆さんに申し訳なく思っている。自分の担当事項に関するせつかくの貴重な書類を目の前におきながら、切り込んでゆく技量の不足から、その資料的価値を充分に引き出せなかったのではないかという思いが強い。

しかし苦戦するうちに、敵のクセや弱点が少しずつ見えてきて、初対決の際の身構え方もわずかながらつかめてきたような気はしている。そして「古い書類がある」などと聞くと、腰を浮かして物欲しげに目を輝かせるという、あの例のスタイルだけは、私もいっちょまゑに無意識のうちにできるようになった。

現在所属している大学では教職課程の仕事を担当しているが、この事務室の書類管理の状態がかなり良好で、全国各地の教育委員会および中・高校と大学との往復や教育実習関係の各種書類が二十年分ほどキチンとファイルされている。それを時々事務の人を煩わせてロッカーの隅から出して貰っては、「私立大学の教員養成の戦後史が書けるぞ……」などというわごとのようなことをつぶやきながら陶然とながめて、部屋中の好奇と不審の視線をあつめている。ただそれが何分

にも場所取りで業務スペースを圧迫しはじめていて、何等かの処分も検討されはじめており、その保存継続をどう可能にするか悩んでいる。

事務書類との付き合いは当然事務職員の人達との接触も伴うわけで、この面では特に編集室初代助手の酒井さんをお手本として、東大内の色々な部署の個性的な事務スタッフとの出会いを得て、大学の今日明日のルーティンのみならず、大学史における事務部門の重要性のリアリティーを理解することができたのは、私にとって大きな成果だった。それで今の大学でも、うるさがられながらも、何かと事務室に出入りすることが多い。

始めの方で大学の機能の多様性に触れたが、これも百年史の仕事を通じて改めて強く印象づけられた。私が特に興味を持ったのは、戦前期の東京帝大の在学者の構成の多様さで、正規の学生（本科生）以外に、選科生・実科生・講習科生・聴講生・研究生・あるいは陸海軍委嘱（員外）学生等々様々な形態や資格での大学へのかかわり方があったことである。これらは様々に改廃され、中には後に独立の教育機関に分離発展してゆくものもあり、いずれにしても、戦前期の帝国大学が、複雑な差別構造をかかえつつ、今日よりはるかに多種類の学生達の教育の場としてあったことには驚かされた。この事についての多少の資料発掘は成し得たものとても充分とはいえず、心残りである。そもそも正規ルートによる本科生中心主義が他の帝国大学とくらべても際立って強い東大において、本科生以外の各種学生の書類的記録面での影が薄いことはやむを得ないとしても、このようなマージナルな

部分を抱え込んだところにこそ、日本の近代教育の特質にかかわる問題があるといえ、今後もこの「影の薄い東大生」に関心を持ち続けたいと思う。

だいたい事務部門についての記述そのものも、今回の百年史ではマージナルな扱いとなっていて、長い間あとに続く日本の大学の事務機構のモデルであり続けた東大を、「大学運営史」上で位置付ける課題を残したといわざるを得ない。しかしこれについても、東大百年史の編集作業を通じてこそ、問題の所在を確認できたのであって、とても口はばったいけれど、私も今後の宿題としようと思う。

百年史編集室と私

柴崎力栄

はじめに

百年史編集室ですごした日々は、閉じられた日記帳とアルバムの中、年賀状名宛人の顔振れ、そして、次第にうすれゆく記憶の中に存在するのみとなってしまった。顧るにすれば余りに接近した過去ではあるが、七年間関与した仕事にピリオドを打つためとあれば、これを最後と思い、使い慣れた「東京大学百年史編集委員会原稿用紙」のマスをうめる外はあるまい。①『通史』Ⅰ～Ⅲ・『資料』Ⅰ～Ⅲの編纂行程の中で旧室員各人が果たした役割について当事者の筆になる記録を蒐めること、②編纂参加の経験が如何なる遺産を各個人に残したのかについて一人ひとりから聞き取ること。この二つが、ここでの『東京大学史紀要』編集部の意図であろう。以下は、旧室員からの回答の一例である。

一、記録と記憶

最初の勤務日は、一九七九年四月五日。その日手をつけたのは、『通史Ⅱ』に収録する太平洋戦争後の部分（当時は『通史』編は全二巻構成の予定であった）の目次案作成の下調べとして、一九五一年の一年間に東大に惹起した事件・事象を探索し、文章化するという作業であった。最後の勤務日は、七年後の一九八六年四月八日。仕事の内容は、『資料Ⅲ』所収の「年表」の最終校正である。この間、週二日

勤務の非常勤室員として百年史編纂に従事したことになる。私にとつて、二十五歳から三十二歳にわたる期間であった。

百年史編集室で手を染めた仕事の第一は、史料の蒐集・整理である。戦後分の「評議会記事要旨」をコピーし、切り抜いて各項目・問題別に分類するのが最初の仕事であった。また『東京大学学生新聞』や『東京大学新聞』をコピーしたり、原紙を東大新聞社から編纂が終わるまでとして長期に借り出してきたりして、執筆のためのバック・ナンバーを揃えもした（百年史の原稿執筆時には不二出版の覆刻版はまだ刊行準備中であった）。百年史のメンバーに加わった時期から見ても、原稿執筆要員とみなされていたためか——私の場合先に室員となっていた先輩諸氏に比べると——史料探索に駆け回るといふ経験は少ない方であった。史料調査旅行としては、一九八〇年八月二十日から二十二日にかけて二泊三日の旅程で、北海道大学百年史編集室に赴いたことがあるのみである。

第二の仕事は、言うまでもなく『通史』編の原稿執筆である。最終的に刊行された時の項目数で数えると、第六編一項目、第七編九項目、そして、第八編九項目の下原稿を草したことになる。百年史の編纂は共同作業であった。自分の起稿した項目を読み返してみると、校訂グループや専門委員の先生方により大きく手が加えられ、改良、洗練された箇所が多いのに気づく。一九八〇年十二月十五日、第六十五回百年史編集室会議の席で、最初の原稿を提出したのに始まり、最後の一項目を手放した時は、一九八五年九月二十七日になっていた。それにして、一か月に一項目の速度で原稿用紙をうめるようにとの圧

力のもとで原稿を綴りつづけたのは、文章を書くうえでよい訓練となった。

第三に、『資料Ⅱ』および『資料Ⅲ』編纂の役割分担があった。

『資料Ⅱ』の編纂が中心の仕事となり、集団力が発揮された一九八四年度。乏しい時間の中で年表カードの起草と推敲に努めた一九八五年度後半。今も印象深く記憶に残っている。

以上の仕事に関連して、普通の国史研究室の大学院生の生活では味わえない種々の経験をさせていただいた。百年史編集室の中で机を並べた同僚達との会話のやりとりは、ある時は当面の仕事から離れて一人ひとりの研究上のテーマにも及び、実に刺激的であった。

二、もし百年史なかりせば

広義の歴史研究従事者が、一次歴史情報の体系的な蒐集とその整理・保存を担うアーキビストと、歴史情報の二次加工を特色とするヒストリアンに分化しつつある正にその現場に立ち会えたということ。『東京大学百年史』に参加することがなければ気づかないまま通り過ぎてしまったであろう第一のことは、これである。

偶々新聞を見ていると、「文書館振興で国際会議／歴史資料保存機関連絡協／浦和市で21日に」(『日本経済新聞』一九八六年八月十九日付朝刊)との記事が目に入った。「今回の会議は、同協議会が文書館の国際組織、国際文書館評議会(ICA)への加入を機に企画した」ものであって、ICAの国際標準化担当責任者である英国国立公文書館副館長マイケル・ローパー氏を招き、「各国の先進事例を研究する」という。「協議会では会議を足がかりに、文書館法の制定、文書士(ア

ーキビスト)の養成、行政文書を文書館へ移管する前の一時保管・選別施設(レコードセンター)の設置——などに取り組む」と記されている。また、思い出せば、今年の五月十三日の『読売新聞』(朝刊)の「社説」欄には、「公文書館で『現代史』の保存を」という主張が掲載されていた。これらは、一つのプロフェッションが社会的認知をえつつある姿であろう。

その場合、歴史を書くことを仕事とする私としては、自分の職種をどのように再把握し、今後の研究の組み立てに反映させるべきなのか。百年史編纂に参加しなければ、こうした疑問をもつことはなかったと思われる。

おわりに

私たちのように一時期大講堂に出入りし編纂業務に携わった者たちが去ったのち、百年史編集室はアーカイヴ化をめざし、あとに残る室員はアーキビストへの途を歩むという。何とんでもその理想が実現し、『百五十年史』あるいは『二百年史』の史料的基础を固めることができるよう祈願してやまない。

(一九八六・八・二十四稿了)

思い出すまま

清 水 康 幸

「君が百年記念事業をどう考えているかは知らない。けれども、百年史編纂についてはお祭りにはならないし、しないつもりだ。

『東京大学百年史』がどういう質のものとして書かれるかは、教育史のみならず日本の学術史の大問題だ。そうは思わんかね。」

私に百年史入りをくどいた時の、寺崎先生の言葉である。大学院の博士課程進学を目前に控えた一九八一年三月のことであった。正直いつて迷った。当時は「百年記念事業反対」の運動が教育学部内でも活発で、院生の学科討論でもこの問題は焦点の一つであった。数日考えてから結局承諾したのだが、私の「決断」を促したものは、「百年史で学問をする」という先生の決意表明にも似た確信ありげな言葉であった。

幸い、そこにはかなり刺激的な学問の場であった。なによりも、ここでなければまず見ることでできない第一級の大学文書にじっくりと取り組む機会を得たことである。評議会記録とか文部省往復とかいろいろあるが、とりわけ私にとって印象深いのは、昭和十二～十五年にかけて活動した「大学制度（臨時）審査委員会」の議事録と、昭和二十一～二十五年にかけての「新大学制実施準備委員会」の議事録を精査したことである。見るからに無味乾燥な、そして活版、タイプ、ガリ版、手書きと雑多な種類の文書が一まとめにされている綴りの山。

初めのうちは、これを見ただけでため息が出た。忍の一字と思い定め、一枚ずつ読みながらメモをとり、年表風に議事進行を整理する作業を続けていった。そのうち不思議なことに、自分はいくつかの案件が案外好みなのではないかと思いはじめた。議事録がそれ自体として面白いのではない。人間味のない文字通りの官僚用語の羅列の裏側に、帝国大学や日本の教育をめぐる情勢の変化や思想的動向、人物の行動論理、等の興味深い論点が見えてくるのである。考えてみればあたり前のことだが、もともと教育史研究でも思想史方面に関心を向けていた私にとって、こういう行政的文書を思想的に読んでいくという経験は、これが初めてだったのである。以来私は、資料というものにかなりこだわるようになった。

私が入室したころは、「試験執筆」という言葉がまだ生きていた。しかし初めて出席した室員会議で、伊藤先生からこの言葉が出たとき、その口元にただようニヒルな笑いを私は見逃さなかった。「あ、この言葉は文字通りに受けとってはいけないのだな」と、その時わかった。以来、原稿の催促が月毎に厳しさを増し、新入りの私としては、これは恐怖であった。当然のことながら、いつしか「試験執筆」は死語となった。

よく考えると、私の入室はまさに執筆要員としてであり、「即戦力」として期待(?)されたものらしかった。入室後まもなく当てがわれた執筆分担は、実はもともと寺崎先生の持ち分であり、私はそのピンチヒッターだったのである。光栄というべきか何というべきか。内容も、章・節冒頭の総論部分が多く、大いに勉強させられた。やはり、

先生に感謝すべきなのだろう。

他の人はどうか知らないが、長野の出張校正は私にとってほろ苦い思い出である。昨年（一九八五）三月初旬のことだった。ちょうどあの時、私は締め切り期限をとくに過ぎた他の原稿をかかえており、血ばした目で電話のベルにおびえる毎日であった。そこへ出張校正のお達しである。しかしこれは前から予定されていたことであり、私自身が手がけた『資料二』が含まれているため、逃げ出すわけにはゆかない。憂うつな、追いつめられた気持ちで信越線に乗った記憶がある。宿舎でのカンヅメ状態のあい間をぬって、一枚でも原稿を書こうと空しい抵抗も試みたが、しよせん無理。結局、あの原稿は帰京後なんとか出したものの、期限オーバー、枚数オーバーが度はずれていたせいでボツになってしまった。自らの未熟さや計画性のなさを思い知るとともに、そんな状況で大事な出張校正に臨んだ申し訳なさに、しばらくのあいだ私は落ちこんだ。四方八方に迷惑をかけたこの経験は、研究者として一人立ちしてゆく上での一つの課題を、私に与えてくれたように思う。

室員には、ずい分と変わった人種が集っていた。専門は日本史と教育史が半々だったが、出身大学はかなりバラエティーに富んでおり、年齢も十年以上の幅がある。これは『百年史』を自己顕彰的なものから無縁な学術書たらしめる上で、重要であったと思う。それはともかく、この「多民族国家」は学問上の刺激はもちろんだが、私の狭い人間理解を広げてくれる上でも大いに意味があった。「キヤーノ」という女性アルバイトの悲鳴にふりむくと、通りすがりにその女性のおし

りをなでて平然としていた某氏の姿があったとか、相当の酒乱を自認する私に輪をかけたような酒乱ぶりをみせ、すっかり私をうれしがらせた某氏とか、元全共闘の闘士をどなりつけた嫌煙権運動の闘士とか、安田講堂の何十という階段を必ず二段飛びで駆け上り、酷暑のおりには「気持ちよい」と言い、酷暑のおりには「さわやかだ」と言い張る「中年」の某氏とか、とにかくいろいろいた。彼らから私を得たものはたくさんあるのだが、うまく表現できないのが残念である。

百年史編集室の十余年の歴史の中で、私は後期の四年間を知るのみである。前半期の資料の整理・収集等にかけたエネルギーは膨大なものであったと思う。そうした蓄積があったおかげで、私のような代打屋でも何とか仕事ができた。この点は先輩諸氏に厚く感謝したい。その私も、この二年間は就職の関係で百年史を離れてしまい、一番大変な時期に傍観者になってしまったことを心苦しく思う。最後に、入室時からずっと一緒だった前田さん、専任として常に寛容に見守って下さった中野さん、そして得がたい経験を味わわせて下さった仕掛人の寺崎先生の御三方に、心よりお礼を申し上げたい。

百年史編集室と私

新谷 恭明

私が東京大学百年史編集室の一員となったのは昭和五十四年四月のことであり、現在の職を得て室員を辞したのは昭和五十七年三月でしたから、百年史編集室にお世話になったのは三年間ということになります（その後も執筆員として手伝わさせていただきましたが）。気持ちの上ではもっと長い期間百年史編集室で仕事をしたいような実感を持っていましたが、数えてみると意外と短かったのだなあというのが正直な感想です。それだけ百年史編集室の存在が私にとって大きな意味を持っていったということなのだと思います。

といいますのも、室員となった当時私はちょうど所謂ODの一年目を迎える年であり、妻は妊娠中でしたので、生活の面で大きな曲がり角にきていた時期でした。それよりも研究面に於て自分のテーマや方法に行き詰まりを感じつつあった時で、当時は物心共に困窮していたのです。そういうところへ寺崎教授（現室長）から東大百年史の仕事を手伝ってみないかとのお話があったわけです。ですから当時の私にとって百年史の仕事をしてみれば経済的にはともかく研究面では何か活路は見いだせるのではないか、という漠然とした期待をもって参加することを決意した次第です。

まずは土田室長直々の面接に参ったのですが、土田先生の威風堂々たる風貌とお言葉のひとつひとつから滲み出る理性の重みに身のすく

む思いをしたことを覚えております。「このような凄いい方の期待に自分は応えることが出来るのだろうか」と不安になり、ふと同席の人物に目を遣りますと、当時東大の国史の大学院生であったS氏がチャリと私を一瞥する視線と交錯してしまいました。S氏も私と共に室長面接に臨んでいたのですが、S氏の厚い眼鏡の陰からキラリと光る眼光の鋭さに思わず「うむ、できる！」と心の中で叫んでしまったのです。

帰宅してもS氏の鋭い眼光が脳裏から離れず、「いったい自分はあるような凡人には無い敵しさを全身に秘めた人達と一緒に仕事ができるのだろうか」とこれは恐怖に近い思いでそれからは眠れぬ夜が続きました。そういう具合ですので最初の出勤の日にはあたかも鬼が島へ向かう桃太郎のような緊張と不安で手足が思うように動かず、赤門から編集室へ至る間に三度も石につまづいて転んでしまいました。

そうして緊張で始まり緊張で終わった百年史編集室での三年間の日々でしたが、そこで得た収穫は私の人生にとってなにもにも替えがたい貴重なものでありました。

その第一は人との出会いであります。常に暖かい眼で原稿の滞りがちな私達を見守ってくださった土田先生を始めとする専門委員の先生方との出会いによって私は学問をすることの敵しさと同時に楽しさをも教えられました。そして室員諸氏とのお付き合いの中で私は新しい世界に目を開くことができました。あの鋭い眼光の持ち主であったS氏が日常の生活では欲情を赤裸々に表現する素晴らしい人間性を兼ね備えた人物であったことを知った喜び、史料の解読の不得手に私に煩

わしさも厭わず親切に教えていただいたもうひとりのS氏、そして限りない優しきで動もすれなく、じけそうになる私を支えてくれたT氏との交流は今では私の最大の財産となりました。また、百年史にかかわる以前から未熟な私を励まし、指導してくださったK先輩にはお返しするには余りあるご恩を賜りました。

百年史で得たもうひとつの収穫は自分の研究上の蓄積と新たな展望を得たことです。室員となった最初の年の秋に金沢へ調査に行った夜に当時の専任委員であった酒井先生に試験執筆で試みに書いた予備門のことを論文にまとめて『東京大学史紀要』に掲載するようにすすめられたのです。自分としては研究面で壁に突き当たっていたので自信は無かったのですが、酒井先生に励まされて何とかまとめることができました。論文を書いてみるとそれまでの自分の枠組みに無かった新しい視点が見えてきて、それが現在では私の中等教育史研究の大きな土台となってきています。酒井先生には本当に感謝しても尽きぬ思いがござります。

また、百年史編集室に在る間に貴重な東大所蔵の原史料を見ることができ、そのことは百年史の執筆は勿論、自分の研究の上でも大いに役に立たせることができました。九大に来てからも度々史料を閲覧させていただきお陰でいくつかの論文をまとめることもできました。現在、九州大学七十五年史の編集の仕事を手伝っていますが、東大のよるな豊富な史料に恵まれず、難渋いたしております。昨今では大学史ばかりでなく多くの研究分野で大学を扱うことが多くなっていますし、それらの研究の水準も日進月歩の勢いで高まりつつあります。そ

れだけ大学所蔵文書の価値は重要になってきていますので、殊に国立大学の先導的立場にある東京大学においては、百年史は終わりましたもこれまで収集した資料の保存と利用、そして新たな収集を確かなものとしていく方策がとられることを切に望む次第です。

東京大学百年史編集室について

季 武 嘉 也

私が東京大学百年史編集室にお世話になった期間は、東京大学大学院人文科学研究所の修士課程に入学した昭和五十四年から六十年までの七年間でした。今、改めて振り返ると、実に長期間であり、且つ週に二三日間勤務しておりましたので、本来であれば相当の量の仕事が出来た筈でありましたが、残念ながら胸も張って同室に十分貢献できたとはとても言えません。寧ろ、周囲の諸先生、諸先輩に初歩的な質問ばかりしていて足も引張っておりました。以下、思いつくままに当時の事を書くことに致します。

未だ日本近代政治史を学び始めたばかりであり、況んや教育史などは全くの素人という状態で編集作業に飛込んだ訳でしたので、当初はただ困惑するばかりでした。尤も最初の頃の私の作業は、「東京大学新聞」から関係部分をコピーし戦後部分の目次案の材料にすることでしたので、本当のアルバイトのつもりで気軽に働いておりました。そんな私の横では、全く見たこともないような史料を縦横に駆使して執筆をされている諸先輩の姿があり、それを見て、とても自分が執筆するなど夢想だにできなかった私は、ひたすら感心し憧れるばかりでした。

しかし、五十五年春頃から状況が大きく変わってきました。出版計画が具体化し、私も猫の手として執筆の一部（勿論、執筆といっても

「試験執筆」であり、のちに諸先生が校訂して下さるのですが）を担当することになりました。しかし前述しましたような私でしたので自信もなく、非常に血腥かった担当項目の割当てで会議では百年史のためにもなるべく控え目な態度をとりました。幸い、伊藤隆先生の温かい御配慮によりまして、私には殆んど無縁でありましたが比較的書易い国際交流関係の項目が割当てられました。尤も、いくら書易いと言っても私には全く雲を掴むような話で何から手をつけたらよいのか全然見当が付きませんでした。この時にお世話になったのが、酒井豊さんであり、また中野実、新谷恭明、照沼康孝各先輩でありました。特に後者の各々には百年史編集室という場所を離れ、百年史編集事業という仕事を離れて様々な事を語り合い種々の事を教えていただきました。今でも非常に印象深く憶い出されますが、お互いのためにこれ以上は言わぬが花でしょう。

そうこうするうちに、その中の一人の中野氏が五十六年四月に常勤室員となりました。中野氏は、出版に漕ぎつけねばならないという厳命を受けていたので、傍から見ても気の毒な位緊張していました。従来、私など編集作業に関わらなければ関わらない程立派な本ができると確信し傍観的な態度をとっていたのですが、以前よりお世話になっていた氏には何らかの形で手助けしたいと思うようになりました。これ以降の時期で印象深いことは、執筆の他に中野氏とともにこなった、通史編第一巻及び第二巻中の引用史料の原典校正作業と、長野市に行つての出張校正です。前者は、勿論単純な作業でしたが、それを通じて様々な史料に接触できました。「文部省往復」、「内田祥

三文書」等の龐大な史料群には初めのうちは圧倒されるばかりでしたが、次第に個々の史料の息吹きを感じられるようになり楽しくなりました。後者も、旅館に缶詰めにされての単純な字句校正作業でしたが、この時初めて通史編を通読する機会を得ました。各人が殆んど独立して執筆し、且つ自分の例も挙げて恐縮ですが、時間に迫われ満足できない状態で原稿を提出しなければならなかったことを考え合せて、果たして本として出版するのに値するか否か不安を持っていたのですが、通読した時その不安は一掃されました。そして、先輩たちのしてこられた努力と才能を改めて痛感致しました。と同時に、活字化されることの恐ろしさも若干感じました。

編集室を離れて一年半の月日が過ぎた現在、編集作業について思い出すのはなかなか困難ですが、諸先生、諸先輩或いは同僚達の顔を思い出しているうちにいろいろな出来事が脳裡に浮かんできました。紙幅の制限がありこれ以上書けません、おそらくこの方々との接触こそ、編集室に勤務して得た私の最大の財産であったのであろうと、今振り返って感じております。

通史の校訂を終わって

田 辺 久 子

同じ日本史とはいえ、専攻分野の全く異なる東京大学百年史編集室での仕事、ようやく終了した。百年史編集に関する私の仕事は、小項目毎に十数名の方々によって分担執筆された原稿群（タイプ稿化されている）の「校訂」という作業であった。はじめ仕事の内容について、当時の室長（委員長）土田直鎮先生から、和暦に西暦を入れたり、出典の書き方の統一等体裁上の統一を行うこと、とうかがっていた。そのようなことなら私でもお手伝いできるかと引き受けたのであった。

私の仕事はタイプ稿を読むことに終始した。まわりを気にしながら変人のごとく読んだ。そのうちやるべき仕事が終わってきた。

その一は、前後タイプ稿における内容的重複を発見すること。

その二は、同一事象に関して、異なるタイプ稿のあいだで、理解・解釈上の抵触はないか注意すること。

その三は、門外漢の私には目につきやすかった行論上の飛躍や、説明不足等の指摘。

その四は、叙述方法（特に原史料の引用方法や、先行研究成果の扱いかた）のバラツキの調整。

その五は、西暦・出典書き入れ等体裁上の統一作業。

近・現代史に素人の私が、そのことを理由に途中でこの仕事を辞退

しようとしたとき、土田先生は、「素人だからよいのです」と言われたが、その意味が少しずつわかってきた。専門家なら知識として当然知っている故に、かえって気がつきにくいという面が有ることを、私自身も経験済みである。そこで、専門家二人（ときに三人。専門家は、その立場で重大な指摘を行ったのは当然である）と素人の私とで行う校訂作業は、それなりに意味があったのか、と終わってみて思う次第である（勿論私以外の素人なら、なおさら効果のあったことは自認するところである）。

ところで通史編三冊の発行が連年であったため、第一巻をのぞくと、一年のうちに校訂から刊行まで行わなければならなかった。すなわち校訂の会議で問題点の指摘を行い、解決のための方法を話し合う。その後実際に調べを行い手を入れるのであるが、ここが最大の苦勞で、この点に関しては多くの場合私は全くの無力で、負担が特定の人に集中してしまった。問題点未解決のまま入稿時期をむかえた部分も多くあり、初校での手直しも少なからずあった。印刷所の方々の協力が得られたことは幸いであった。校訂から校了までを一年弱の間に終了させることは、本百年史編集室の体制では大変きつかったと思う。

私が携わった通史編三冊の出版を終えたいま、一つのまとまりのある仕事に参加できたことを幸せに思っている。専門家の御教示により、近・現代史の資料にも少しはお馴染みになれた。そして現代史の難しさも垣間見たように思う。

足掛け五年にわたる（勤務は週二日）百年史編集室での仕事が大過

なく終了できたことを、委員・室員の方々に深く感謝しつつ、筆をおきたい。

百年史編集室と私

館 昭

昭和五十一年の夏から五十三年の春まで、百年史編集室の室員を経験した。もう十年も前のことである。五十三年の四月からは奈良教育大学で教壇に立った。そして一昨年から千葉にある放送教育開発センターで大学教育の研究開発に従事している。その間に色々なことがあった。でも不思議に百年史時代の記憶が鮮明である。それは私にとってその時期が学生から職業人への過渡期にあったこと、また善き人間関係に恵まれたことなどによるのだろう。

五十二年四月までの仕事は、主に写真集作りだった。その年の四月十二日に東大の百年記念式典がホテル・オークラで行なわれたが、その折に配られた『東京大学の百年』がそれである。式典の「引き出物」作りという説もあった。しかし百年史の編集事業としては、この機会に図版資料の骨格を作っておくという役割が課されていたのである。この写真集の編集委員は委員長に当時の室長の笠原一男先生、附属図書館長で式典委員長の安藤良雄先生、編集室の護雅夫先生、稲垣栄三先生、寺崎昌男先生、広報企画課の清水洋美掛長それに非常勤室員で教育学科研究科博士課程三年の私という構成であった。期日が迫っている仕事なのに、何等の準備もない状態だった。私は編集室の仕事はさておいて、専らこの仕事に専念した。

実務的な仕事は寺崎先生の指導の下に、私が担当した。勿論酒井さ

んと弥永さんの全面的な助力のもとである。始めはとにかく写真や図版を集めてまわる仕事の主である。そして暮頃から編集にかかり、何とか式典に間に合わせた。その間に、附属図書館の地下で『朝日グラフ』の全巻をめくった。『帝大新聞』も全頁をくった。施設部の屋根裏部屋に保管されていたガラス版のネガをおそろおそろ透かしてみた。国会図書館の書庫にまで侵入した。旧制高校の同窓会を訪ねた。キャンパスの全景を写すために、飛行機にも飛んでもらった。写真家が複写写真にまで著作権を主張することも知った。東大出版会の泉さんとのやりとりでも、随分教えられることが多かった。

することなすこと初めて、という状態であったが、先輩、同僚の皆が助けてくれた。とにかく、一院生が通常のアルバイトをしていたのでは体験できないような良い経験を積ませてもらった。送られて来た『百年史』を手にしたとき、まず図版を見た。そのなかに自分が見つけた写真の幾つかを発見して、ちょっぴり懐かしかった。

写真集が出てからの仕事は、他の室員と同様のものとなった。身分は学術振興会の奨励研究員にかわっていた。まだ編集とか執筆とかという段階ではなく、もっぱら資料の収集とその整理に仕事の力点があったところである。年史の編集を大学の単なる顕彰にすることなく、歴史研究として行くのだという気概が、室員全体にみなぎっていて、とても楽しく仕事ができた。とくにディシプリンとの違う国史の人達と交流ができたことは実に得がたい経験であった。ちなみに、私の専攻は教育行政学で、近代大学史に興味を持っていた。

そんな中で、紀要発行の話がでた。その編集幹事をやった。昭和五

十三年の二月に創刊されている『東京大学史紀要』である。年史の編纂と大学史の研究をつなぐメディアということで、随分張り切って取り組んだおぼえがある。論文を中心に構成する、それも学会誌に発表しても通るようなものという位置づけで企画した。結果として寺崎先生の「東京大学成立前後」を始めとして、伊藤先生と鈴木さんの南方・立地自然科学研究所、三谷さんの明治期の学生の出自・進学要因分析、宮崎さんの全学会、それに私の大正期の帝国大学令改正案に関する五本の論文が集まり、その意図は達成された。

奈良に移ってから執筆者ということでも編集室に出入りさせてもらった。また有意義な交友関係も引続き発展させることができた。しかし、段々と新しい仕事の比重が増し、研究関心も、現代へ、そして外国研究へと移ってしまい、肝腎な『百年史』自体の編纂には、帝国大学の成立期の叙述の下書をさせてもらった程度で、たいした貢献はしていない。それどころか、最近では原稿が書けなくてご迷惑をおかけしたり、資料のことなどでお世話になったり、といったことばかりだった。

ともあれ、私にとっては、百年史編集室での公私こもごもの経験は、一生忘れ得ぬ思い出である。

百年史編集室と私

照 沼 康 孝

私が最初に百年史と関わりを持ったのは、昭和五十二年の春だった。以来校訂作業まで含めると九年間、百年史の編纂に携わってきた。この間に二回ほど出張ということで地方へ出掛けた。二回目は京都大学への史料収集であった。東大では戦時中の史料の一部が、敗戦直後に行われたといわれる書類焼却と紛争とによって失われており、その穴を埋めるための出張であった。そして、一回目は平泉澄氏のインタヴューであった。

今回の百年史の編纂では、当然のことながら五十年史に記されている時期の記述の全面的な書き直しと、それ以降の五十年の根本からの史料収集による記述が行われた。後者の時期はほぼ昭和という年号に相当する期間であり、その中でも戦後体制下の記述は今回の編纂の一つの課題であった。そのために旧職員、例えば長与又郎、平賀譲、内田祥三といった歴代の総長の史料と遺族から借用したり、存命者に対するインタヴューを行った。平泉氏のインタヴューもその一環として行われた。

昭和五十四年十一月下旬、晩秋の北陸にしては暖い日に福井に着いた我々、つまり私と伊藤隆助教授、酒井豊室員、狐塚裕子室員の四人はそこから更に京福電鉄に乗り換え、勝山に着いた。市内の旅館の土蔵を改造した一室に荷物を置き、タクシーで平泉寺に向った。平泉寺

の集落を抜け、白山神社への木立に覆われた参道を登るとそこで行き止まりであった。十軒ほどの土産物屋が並んでいたが、客はほとんどいない。緩かな石段を登っていくと鳥居が立っている。そして、電話連絡してあったためであろうが、意外にも平泉氏は鳥居の下で我々を待っていた。挨拶の後、氏は境内を案内しながら、その維持の困難さを語った。その間、肌寒さを感じた我々がコートポケットに手を入れると、ポケットに手を入れるのではないと凜として言われた。

社務所を兼ねた自宅の一室に招き入れられ、その後約二時間ずつ四回話を伺った。その内容については現在かなり忘失しているが、テープに録音してあり、いずれ全体を活字化する機会もあろう（平泉氏の遺稿集或は追悼集といったものの刊行が予定されているとのこと、これらのテープは最近遺族が複製を作ったが、あるいはそこでこの一部が活字化されるかもしれない）。以下では思い出すままに、このインタビューの模様の一部を記してみたい。

まず正座である。私は当時足首を少々痛めていたこともあり、最初の二時間はなんとか耐えたものの、終了後立ち上がるのが非常に困難な状態となり、その後は怪我を理由に足をくずすことを許された。他の三人は最後までなんとか持ちこたえていた。それにしても火の気もない部屋で正座してのインタビュー、ポケットの一件とともに、最初からかなり緊張を強いられるものであった。

さて、このインタビューの目的であるが、それは氏が在学、在職した文科大学および文学部国史学科を中心に、当時の東京帝国大学の状況の一端を聞くこと、特に昭和十年代の状況を伺うことであった。

しかし、結論から言えば、我々が最も聞きたかった日本思想史講座、朱光会等に関する話は余り聞けなかった。それ以前の話に時間をとられ過ぎたことと、氏の応答が比較的簡略であったことによる。私の記憶にあるのは、日本思想史講座を設ける際のことについて、自分が前々から言ってきたのにやらないでいるうちに、文部省から言ってきた天下り式にやることになったのは残念だったというくらいである。

それ以外では中学時代、体が弱く短命であろうと言われたが、現在生き残っているのは自分ぐらいであるといった話、卒論の話等があった。その卒論は現物を見せてもらったが毛筆により格調高い文章で記されていた。更に髭の話も出た。教壇に立った頃、小使さんに学生と間違われたため、夫人の忠告により延ばすこととなったとか。こうした話をする時の氏は、それ以外の時とはうって代った柔和な、多少照れたような顔になった。それは夫人が顔を出した際も同様であり、また夫人に対しては余り亭主関白といった雰囲気ではなかった。

その他覚えているのは銀時計と刀である。銀時計はいわゆる恩賜の銀時計である。これについては、氏が卒業の際が行幸があった最後であったと述べ、更に声を落して録音を止めるように言い、その理由として社会主義運動が盛んになり、天皇の暗殺計画が伝えられたためであると語った。これは初めて聞く話であったが、その真偽の程は今もって定かではない。刀は大振りの日本刀であった。どういふ話からそうなったのか明確に思い出せないが、陸軍士官学校へ話をしに行った際に持参し、この刀のようになれと言ったとのことであり、その刀を

持って来て我々の目の前で抜いて見せてくれた。かなり重そうであり、少々鈍く光る刀であった。

こういった話を交えながら、延八時間程の話を伺った後、もう一週間もすれば雪になり、春まで閉じ込められるという氏の言葉に送られて山深い平泉寺を後にした。これも今となっては大分前の思い出となり、氏も亡くなられた。もう少し昭和期の話を詳しく聞かなかったことが今となっては心残りである。

労働環境Q&A

野口 貴代

Q 仕事の面で印象は？

A 特に思い出すようなこともないんですけど……。事情がわからないので、どうして本が出来ていくかもよくわからずじまいでした。

Q 何かこれという話はどうですか。

A そうですね、設備が余り十分でなかったことか……。冬、暖房が不十分で寒い風が吹きぬけたりする部屋での仕事でしたから、しもやけがすぐできました。

Q 地震なんかでは？

A グラグラつてくると、皆さん青くなるんですよ。いつ崩れるかって……。本棚がキコキコって音を立ててきしんだりすると、思わず腰をうかす人もいたりして。

Q こわそうですね。カミナリの方はどうですか。

A 雷は幸い経験せずにすみしました。でも、雨の時は場所によっては降りこんで、特に七階には水たまりが出来ることがあるので、台風の翌朝なんか、中野さんがおそるおそる階段を登っていく姿が何とも印象的でした。それと、五階、つまり私たちの居たフロアのベランダあたりからも豪雨の時は浸水するらしく、コンクリートの床に小さい水たまりが残っていたこともあります。いつだったか、もうそれは覚えていません。聞いた話では五階の天井、今書庫になって

いるあたりですよ、あのあたりから水がザーザー降ってきたこともあったとか。でもその時はまだ書庫じゃなくて、昔の広報が事務室として使っていたということでした。

Q すごい話ですね。ところで、ここは五階とおっしゃいましたが……。

A そうなんです。エレベーターもなく、階段も細いのがひとつしかない五階なんで、火事でも起こったらどうするんでしょうね。昔の建物だから十階もあるのにエレベーターをつけてないんですよ。年配のお客さんがいらした時なんか、気の毒になっちゃって……。それにトイレの遠いことも困ったことですね。女性は三階まで六十段くらいおこななければならぬし、人間の仕事場だということとは余り考慮されていないんですよ。初めてここに来た時は「百年史」という部屋がこんな場所にあるということ自体が驚きでした。水道はと言えば、茶色い水が出るばかりでお茶もおいしくないし……。まあ、あの紛争のあとそのまま使ってるような建物なんですから設備のことを言っても仕方はないとは思いますが、恵まれない環境だったと思います。何か悪いことばかりになってしまってますみませんでした。

年表のことども

前田 一男

私の在室期間は、昭和五十六年四月から六十一年五月までのまる五年間である。ということは、幸か不幸か通史編、資料編の刊行にすべてかわることができたということになる。年ごとに先輩方が就職していかれたため、必然的に仕事量が増えていき、徐々にではあるが少しはましな室員になっていったかも知れない。特に昨年度は、減ってしまった室員で例年と同じ仕事量をこなす翌年三月には無事通史三、資料三を刊行しなければならないという緊張感をもつての出発であった。

その点で、最終年度の年表作成の仕事は印象深い。年表というのは年史編纂のなかでも最も基底となる部分であり、ひよっとしたら資料編のなかで最も使用頻度が高いかも知れないと教えられ、私自身やり甲斐を覚えながらの仕事であった。

年表の基本となったのは、年号照合カードである。これは通史編に出てくる年月日が正確かどうかを調べるための原典照合のひとつで、通称タイプ稿（試験執筆原稿をタイプ化したもの）から日付のついた記述をすべて抜き出して作成されたカードで、通史一、二だけでゆうに六千枚を越えていたと記憶している。それらのカードは原典に照合されている点で年月日は信用できたが、機械的な記述にとどまっており、年表項目の記述としてそのまま使えるものはほとんどなかった。

つまり、その膨大なカードを、東京大学の関係事項と関連事項とに分け、年月日順に並べかえ、年表項目として書きかえていくということだが、年表作成の基本的な仕事であった。

百年以上にわたるものをひとりで担当することは到底不可能であり、中野実さんが幕末から明治三十年までを、私が明治三十年から昭和二十四年までを、柴崎力栄さんが昭和二十四年から五十二年までをと、形式的には通史刊行の区分に沿いながら、とりあえず各々が担当することになった。これから刊行される通史三の年表化の担当となった柴崎さんは、なかなか出て来ない残っている原稿や、かと思えば今度は一度に大量に出てくる初校を相手に、年号照合カードと年表カードの作成を同時に進めなければならず、さぞや大変であったらうと思う。

この年表作業に本格的に取りかかったのは十月の中旬からであった。考えてみれば、刊行までにあと半年もなかった訳である。

年表項目化の最初にしたのは、廻り道でも通史二を精読することであった。利用できる年号照合カードを基礎に、通史の記述をできるだけ簡潔に項目化していった。これは、年表にストーリーができるメリットと、年月日を多く記述している項目とそうでないものとにムラができるというデメリットとがあり、前者についてはできるだけカードを捨てる努力をした。通史を読みながらの年表カードの作成は、一日七十頁進めば上出来な方で、迫る期限と遅々たる進捗とに挟まれて、緊張感が絶えなかった。しかし役得といふべきか、通史二については、私もさほど多くないであろう通読者の仲間入りをさせていたのだい

た。

そのようにして作成されたカードは、中野さんに第一段のチェックを受ける。記述の不明瞭な点、不要と思われるカード、言葉の統一等々について、厳しい指摘が返ってくる。それらを踏まえ調べ直してカードを書き直し、再度中野さんにチェックしてもらい、一定の期間まとまりのついたものから入稿していった。私は「復活折衝」と呼んだのだが、不要と指摘を受けたカードでも必要と思うものは再度入れ替えた。初校の時にも同じことが繰り返されたが、中野さんの指摘になるほどと感心するときはあれば、ちくしょうと思うこともあり、中野さんとの往復は私にとっては真剣勝負であった気がする。年表項目の素材の点からいえば、資料一、二から各学部、前身校、包接校の規則や規程を補ったのはもちろんのこと、同時に進行中であつた人事カードからも、総長任期などの正確な情報を提供してもらつた。その他信頼できる年表からも東大関係の項目を探し、抜け落ちのないように努めた。一方、建築物や学生生活に関する項目については、増やしたいと思いつつも、最小限にとどまってしまうた。

そのような第二段階のチェックを経て自分の担当部分を入稿し終わったのは、結局二月中旬であつた。この頃には他の室員と同様、都合のつく日はすべて出勤、午後十時の正門閉門が仕事に区切りをつける目安であつた。

それ以降、残り少ない時間で校正作業に没頭し、幕末から昭和五十二年に至るまでの全体の調整や勅令訓令番号の補充確認、細部にわたるレイアウトなどに明け暮れた。そして再校の段階で第三チェックと

して委員長の寺崎昌男先生と専門委員の伊藤隆先生に通読していただき、指摘されたところを直し、さらに四月の出張校正でも中野さんとの往復を続けながら、いっばいいいっばいで年表作業が終了したのであった。原稿を手放す時の、やっと解放されたと思いつつもこれで大丈夫だろうかという不安の入り交ったあの感覚は、何とも表現のしようのないものだった。

百年史にかかわらせていただいたことが、これからの自分にどのように反映されていくのか、今のところわからない。けれども、追いつみの二月下旬から四月上旬にかけて連れて行っていただいた延べ十三日間三度にわたる長野への出張校正、そのなかで味わった期限が決められた本づくりの厳しい仕事の手順と研究的な質を確保するための最大限の努力、そこにかもし込まれた悲壮とも思える独特の雰囲気は、忘れることができない人生の想い出となりそうだ。

私が東大百年史の編纂に関係するようになったのは、たしか一九七五年の春、二五歳の頃であったかと思う。当時、編集室は時計台にあった広報企画課の一室を間借りする形で店を開いたばかりで、室員は酒井豊、弥永（現小川）千代子ご兩人と私のたった三人であった。採用の事情はよく知らないが、私の方では、修士論文に明治の東大を舞台とした社会史を書いたのが関係あるのだろうと解釈していた。初期の小委員会で、故井上光貞先生が、「君は「五十年史を編集執筆された」大久保「利謙」さんの跡を追ってゆくんだね」とおっしゃったことが、今に記憶に残っている。しかし、私は一年ほどで編集室を辞し、研究テーマも幕末の政治史に変わった。一時室員に復帰したこともあったが、就職にともなう極く短期間におわり、その後は執筆員として一部記事を寄稿したにとどまる。百年史の編集・刊行にかかわる労苦は、すべて委員の諸先生と他の室員の方々が担われたのであって、私にはここで回顧するほどの材料も感慨もほとんどない。

しかし、編集室の業務がめでたく完了を迎えたこの時点で、当初私が強く意識していた課題を想い出しておくのは、今後との関係で無益ではあるまい。その課題とは、百年史は五十年史に五十年分の続篇を追加するものであってはならず、半世紀間の学問の進歩を反映したものとやらねばならない、ということであった。聞くところによれば、五十年史は大学卒業直後の大久保先生がほとんど独力で執筆なさった

ものという。歴史家のはしくれとして、史料の探索から整理、そして歴史像の造形という仕事がいかに労多きものであるかを日々痛感している私は、五十年史を繙くたびに、日本の大学史の若き創業者の努力に深く思いを致さざるをえなかった。しかし、研究のための閲読は、同時に、不備な面をも明らかにする。例えば、制度史が主で実態面の記述が乏しい点、あるいは、明治一〇年代について、前身諸校中、東京大学が過大なウエイトをもって取上げられ、工部大学校、司法省学校、東京農林学校等が軽視されている点などである。このようなバイアスは、五十年史の後に書かれたほとんどの研究書や概説書に受継がれていた。そこで、百年史の編纂に関与した当時の私は、この機会にかかる欠陥を補填・是正し、あわせて五〇年間の関連諸学の進歩を盛込みたいと願っていたのである。

今日刊行をみた百年史がこのような願望をどれほど満たすものとなっているか、私は今それを判断すべき立場にない。ただ、多くの執筆者の協力の結果、初めの予想よりはるかに多面的で情報の多い書物となったことだけは疑いないように思われる。しかし、私は、ここでは成果を顧るより、むしろ今後の課題について述べようと思う。それは、百年史を金科玉条の権威として祭り上げず、読者は勿論、執筆者自身も批判的に読んで、各自の大学史、学術史、教育史研究等の展開の出発点とすることである。印刷された文章を読むとき、我々はそれが完全に正確無比なもののように錯覚しがちである。しかし、自らの執筆当時を振り返ってみれば、問題の設定、根拠とすべき史料の捜索、そして分析と叙述のいずれについても、我々には頗る心許ない思いを

したのではなかったか。原稿用紙に書付けた文字には躊躇いの跡があり、行間と余白には無数の疑問符と修正が書込まれ、多くの重要問題を時間や能力の壁に阻まれて切捨てたのではなかったか。校訂を経たとはいえ、むしろ残された問題の方が多いことを、当時の我々は痛感していたはずである。他方、百年史は特定の視角から一貫した解釈を下した史書ではない。多数の分担執筆の結果、自らそうなのであるが、東大の巨大さと多面性、および様々の情報をできるだけ選別せずに世に紹介するという目的から考えると、それは長所とみてよいであろう。しかし、研究という立場からすると話は別である。東大は近代日本社会の中でどのような地位と役割を担ってきたのか、他の高等教育機関や研究機関と比べてどのような特徴を有し、いかなる関係と結んできたのか、このような問に対し、百年史はほんの手がかりを与えるに過ぎない。それは既に一大学史をこえた問題であって、これに答えるには、東大以外、大学以外、近代日本以外の知的探求と教育の組織に目を向け、その交錯と消長を研究せねばならないであろう。幸い、我々の前にはよき模範、大久保先生の『日本の大学』がある。文明史の立場から律令期から明治まで香り高い叙述を行ったこの名著は、再び我々の先に立ち、後に続けと呼びかけているのではあるまいか。

私は安田講堂の入学式を経験した最後の学年に属し、現在は東大とは全く類型を異にする学校で働いている。百年史に貢献すること些少にもかかわらず、敢えて妄言を呈する所以、室員諸兄姉に諒とされれば幸いである。

「主要人事一覽」を作成して

米田俊彦

「資料三」所収の「主要人事一覽」作成の過程で生じた諸問題を書きとめておきたい。

(1) 東京大学発足以来のすべての教員のリストが存在しないということがまず問題であった。たまたま庶務部人事課で履歴書等の記録をよく保存してあったので、かなり把握できたと思われるが、それでも何人かが落ちていた。とくに明治十年代は不十分である。

(2) 一八三頁にわたる「六 教員」欄に掲載した「教員」は、凡例に長々と記したように、きわめて複雑な基準を設定してのものである。とくに文部事務官（史料編纂所）・文部技官（伝染病研究所等）を加えたのは、昭和二十四年に国立学校設置法が制定されたのち、しばらくしてから教授・助教授になった人がかなりいたためである。ここでは二十四年五月三十日以前に任官した人だけを掲載したが、これ以降文部事務官・技官となり、実際には教員として勤務した人もいたようであるが、履歴書からは実態がつかめないのも、このような基準となった次第である。

(3) 地震研究所、東洋文化研究所、および航空研究所は、戦前所員制を採用していた。学部所属の教授・助教授が所員に補される場合、学部兼勤を命ぜられている例が若干あったが、研究所兼勤の辞令はなかった。したがって、学部兼勤の辞令が出ていない場合は学部を本

務、研究所を兼務とみなした。しかし、そもそも任用形式の異なる学部と研究所が本務兼務の関係にあったのかどうか、また実態がどうであったのか、疑問が残るところである。

(4) 明治十年代の東京大学の教授・助教授のかなり多数が、帝国大学令の制定（明治十九年）の際、その身分を失っている。しかしその失い方は多様で、履歴書をみると四通りあったようである。すなわち①非職となる、②「自今出勤ニ不及」とされる、③助手に任ぜられる、④雇となる、という場合である。帝国大学令は三月二日で、助手および雇については同月十二日に辞令が出ているが、非職と「自今出勤ニ不及」の方は発令日がまちまちであり、月末に出ている場合もある。帝国大学に東京大学（助）教授がしばらくいたことになってしまいが、発令まで在職していたものとみなした。なお、非職によってただちに身分を失うわけではないが、この時期に限って失ったものとした（他はすべて非職満期をもって退官とした）。

(5) 配列はあいまいな順序を採用した。しかし人名の読み方がすべてわかっていたわけではない。履歴書にルビがないものもあり、その場合には推定せざるを得なかった。誤った場所に入れてしまったものもあるかもしれない。また字体であるが、人名であるから履歴書にある通りに表記しなかったが、作業の能率化という点から新字体に統一した。しかしたとえば「瀧」、「嶋」をそれぞれ「滝」、「島」にした点などはかなり迷った。

以上おもなものだけをあげてみたが、細かい問題は非常に多く、立ち往生することもしばしばであった。ひとつの原則を決めても、それ

にあてはめることのできない事例があまりにも多く、問題が生じるたびに原則を改めなければならなかった。最も大きな方針の変更は、(常勤)講師を掲載するのをやめたことであった。講師の数は作業を開始した当初予想していたよりもはるかに多かった。カード化している途中でその数の多さに気づき、断念せざるをえなくなったのである。

今回のこの一覧を基礎として、将来より正確な、そしてより詳細なものができることを期待したい。

百年史とわたし

第一法規出版 永原雅彦

原稿はなかなかそろわない。校正刷は見違えるように真赤になり、追加原稿がはさまってごわごわになって返ってくる。予定ページは一五〇%にふくれあがり、まるでサイコロのような本になってしまう。このような状況をみごとに乗り切り、通史・資料の六巻が完成いたしましたことを、心よりお喜び申し上げます。

私がこの東京大学百年史の担当に加わったのは、通史・資料のそれぞれ第二巻からでした。百年史に携わる当社の編集・印刷部門が長野にある関係から、百年史編集室と長野の各部門との中継ぎを担当しておりました。

そのころはもう通史一、資料一が完成し、中野先生をはじめ百年史編集室の方々も印刷の工程をすでにごぞんじでしたが、同時にスケジュールはぎりぎりどこまでおぼせるか、ということも体験として理解されていたようでした。

通史二・資料二の二巻を六十年三月、通史三、資料三の二巻を六十年三月に完成させる、という計画でスケジュールが組まれました。どちらの場合も前年の秋ごろ原稿をいただき、六カ月程度の制作日程でした。

予定は、あるときは少しずつ、あるときは大幅に、しかし確実に遅れていくわけですが、完成の予定だけは絶対に延ばすわけにはいか

ず、年が明けたあたりからがぜん忙しくなってくる、というのが変わることにない状況でした。

夕方、ゲラを長野に送るための東京・長野間の会社の定期便の時間を気にしながら、大講堂の編集室で校正刷の返却を「待つ」のが日課で、これがなかなか大変な仕事でした。毎日一時間半くらいは待っていたのではないでしょう。編集室には、仕事の合間の息抜きのためだろうと思うのですが、非常に美味しいお酒がおいでありまして、これでも飲んで待っていて下さいと言われ、結局ゲラは貰えず、お酒だけ頂いて帰ったことも何度かあったように記憶しています。今から思うとあれは巧妙な編集者退治の作戦だったのではないのでしょうか。

完成前一月となると、いよいよ出張校正が始まります。長野市内のホテルに一週間程「かんづめ」になっていたが、最後の校正作業をしていただくわけですが、大講堂の編集室をそのままホテルに移してしまおうという程に資料のつまったダンボールを抱えて、長野の町を駆け回っている姿はいかにも圧巻です。

社内では編集・レイアウトの部門を伊藤、印刷部門を中島がそれぞれ担当していましたが、その二人の「まだ赤字がこれほど残っているのですから、今回は発行を四月にのぼすというところでしょう」との言葉で、決して四月に延ばすわけにはいかない百年史の出張校正が始まります。

この一週間余、会社の他の仕事をストップさせて百年史のために費やすわけですから、当然社内では「最近ちっともゲラが出てこないが、どうかしたのか」というとんでもない状況に陥ってしまいます。

思えば、組体裁などを決める最初の編集会議の折、中島がポイント尺をジャラジャラ鳴らしながら「9ポイント、四八字、一七行、行間九ポ、これが美しいんです」と言ったあたりから、この百年史の仕事に対する思い入れはただごとではなかったのでしょうか。

この間の作業の回転といったら凄まじいものです。出張校正が始まる前にはまだ相当の赤字が入っている千ページ以上の分量を一週間の間に二回転以上させるわけですから、校正のほうもその作業量は大変なもので、作業の合間に善光寺参りという余裕もないわけです。

部屋のなかには、初校、再校、三校のゲラ、あるいは気つけ薬の酒壺などが入りみだれ、それが作業が進むにつれてしだいに整理されていくのは、はたして予定どおり終わるのかと内心いぶかっていた私にとっては一時の心地よさといえました。

最終の校了ゲラを受け取ったときの感激はまだここに残っています。

「美しく刷りあげるためには、工場の最高の機械一台で全ページを通したい。そのための時間を充分とっていただきたい」との中島の希望もむなしく、完成予定まで残りわずか二〇日。

最後の校了ゲラを渡しながら「期日までに最高のものをつくってほしい。そのためには何でも手伝います」と言う私に対して、「おまえにできることはもう何もない。あとは任せておけ」と言う中島の頼もしい言葉は決して忘れることはできません。

ご協力をいただきました全ての方々に感謝いたします。ありがとうございます。